

TATSUYA SHIMIZU

## 学生時代は旅好きで 寡黙なナンバー2タイプ

——まずは、研究者の清水先生ができるまでということで、先生はどんな子ども時代を過ごされましたか？

清水達也(以下、清水)もともと西宮で生まれて、父親は研究者で、結構真面目で研究肌でした。母親は若干「飛んでる」ところがあつて、当時の女性には珍しかったと思うんですけど、学生時代は自動車部に入っていた、そういう感じです。どちらかというと僕の性格は母親似かなと思います。あと、僕は全く覚えていないけれど、生まれてすぐにアメリカに連れられて、3歳6カ月までいて日本に戻っ

研究者たちの素顔

Vol.02

清水達也

Interviewer

村岡・松浦・宮田

雄弁は金

沈黙は銀

旅行のときはアクティブだが、

基本的には寡黙。

率先して何かやるというよりは、ナンバー2が多かった。これまでを振り返りそう語る清水達也教授。

ラボのメンバーを率いて心筋再生の研究に勤しむ

現在からはイメージできない「沈黙は金」タイプだった

清水先生の価値観を大きく変えたのは

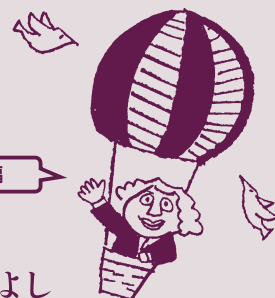
岡野光夫先生と大和雅之先生、

2人の研究者との出会いだった。

COLUMN  
01

## 石川烈の 「何でも見てやろう」

ヨーロッパ編



### 見てよし、食べてよし

盛大な見送りを受けて日本を出発したあと、まずは先輩をたよってコペンハーゲンに1週間ほど滞在しました。その時、こんなにきれいな街があるのかなと本当に思いました。でも、驚いた事にヨーロッパの中ではコペンハーゲンなんてベストワンになるような街ではないのです、もっときれいな街もその後にくらでもありました。

それから、むこうは食べ物がいずれもすごくおいしい、日本より絶対においしいです。まず量がすごい。ドイツは、魚だったら魚がポンッ、肉は肉で山盛りに出てくるし、大ざっぱです。コペンハーゲンや北欧は魚がおいしい。スイスはほとんどのものがチーズ料理で、チーズの天ぷらまでありました。食べられなかったのは血を固めた料理です。本当に血液だけを固めたもので、血がゼリーのようになっているんです。それがボーンとお皿の上に載ってきて、これは何だと聞くと、プタかなにかの血液だと。今でもあれだけは食べたくない。当時、私が住んでいたペンションは、朝と晩の2食付きで食堂に集まってみんなと食べていました。その料理はだいたいおいしかったし、食べ物で嫌な思いをしたことはほとんどないです。余談ですが、私はタイが大好きですが、タイ料理が嫌いです。パクチー、あれは頭がガンと痛くなる。タイからは留学生も受け入れるし、私も何度も行っていて、歓迎されると山のように盛ってくれるのですが、それだけはやめてくれと(笑)。そういう意味では行き先がスイスでよかったですね。

### 言葉の壁を乗り越えるにはどうするか？

言葉の壁と言え、フランス語でのカルテ作りは大変でしたね。当時はタイプライターでしたが、自分のやった手術とか、全部報告書を出さないといけないから。今それをやれと言われたらゾッとするけれど、逆に言えば、1人で行って必死になって、とにかくここから追い出されたいいけないと思いつながらやれば、結構できるようになります。話すほうも6カ月間は全くフランス語が分からなかったけれども、ある日突然言葉が聞こえてくるのです。赤ちゃんが言葉を覚えるのと同じ。フランス語はみんなりエゾンするから、全部センテンスとして覚えて頭に入れないと答えられない。それが聞こえてくるのが半年過ぎたぐらいからですね。初めて聞き取れたのは、「Je Voudrais savoir～」という言葉です。英語で言えば、「I want to know～」ですね。

そうそう、海外へ行って一番感じた事は、挨拶がちゃんとできないと駄目ということ。向こうは朝早いほうが美德なので8時には外来が始まりますから、早い人は7時ぐらいに来ます。私は8時ちょっと前ぐらいに行くのですが、教授が玄関に立っていて、みんなと「Bonjour Monsieur.」という感じで必ず目を見て話します。そこで挨拶もできないという男がいました。まず挨拶。だから私はみんなに、ヨーロッパ、アメリカに行ったら挨拶がちゃんとできれば何も困ることはないからと言います。それは英語であってもフランス語であってもいいわけです。「Comment ca va?(最近どう?)」とか、「Comment allez-vous?(ごきげんいかがですか?)」とか。

ここで身につけた挨拶術のおかげで、私はいつも出会いがいい。例えば、私がスイスに行ったときに、ちょうど同じようにドイツのベルリン大学から来ていた男がいました。彼は、ホンダの360が何かに乗っている日本びいきで、英語も良くできたのでいろんな事を私に教えてくれた。そんな風に助けてくれる人がいつもいるのです。じっとしていたら絶対に出会わないのに、旅行をするとそういう人に必ず出会います、不思議なぐらい。



高校3年生の卒業旅行。ハレーすい星を見に行った。

いうこともあって僕たちはその先生と仲良くなりました。それで、僕を含む仲間達がどんと20人ぐらいワンダーフォーゲル部に入ってしまった。授業は全然聞かないで、なめまくっていただけ、一方で先生を慕っていました。そんな感じで最初から入っていた5人ぐらいの真面目な部員と、後から入った不真面目な15人との20人ぐら

清水 いや、どちらかと言え  
——先生はみんなを引っ張るタイプなんです。

ば、ナンバー2的な立場のことが多かった。今もそういうところがあるけれど、そのほうが性に合っているのかな。大学時代のサッカー部でも、どちらかと言うと会計とか、サポートの方に回るほうが好きでした。良く言えば、リーダーが少々厳しく言うところ、僕はその間に立って調整をしたり、緻密に細かくいところをフォローしたりしていくほうが性には合っていたということです。この間、娘の持っていた性格診断とか何とかいうのをやってみたら、まさにその通りの診断で、妙に納得してしまいました。そういう

**ナンバー2的な立場が多かったです。**  
**今もそういうところがあるけれど。**

キャラクターはその頃から変わっていないと思います。変わったのはしゃべるようになったことぐらいです。30歳まではあまりしゃべらなかつたです。自分の意見をディスカッションとかで言うタイプではなかったし、大学時代も沈黙は金みたいな環境が多かったし、余計なことば言わない。もともとおとなしいというか、旅行の時はアクティブにやるのだけれど、基本的には率先してというタイプではありませんでした。今はかなり無理をしているのかもしれません(笑)。

——先生が子どもの頃影響

——やはり当時から医者・研究者をめざしていたのですか？  
清水 全然です。学研の『科学』は取っていたとかあるけれど、特別に医学とか科学に興味は無かったです。ただ、父が医師・研究者で

**学研の『科学』は取っていたけれど、  
医学や科学に興味は無かったです。**

母方の祖父が医師でしたので、その影響で何となく医師というキーワードは頭にあったのかなと思います。強いと言えば、小学校の頃『ブラック・ジャック』とかを姉と2人で読んでいました。だから医者に対する抵抗は無かったです。そういうので何となく漠然と、将来は医者になるのかなと思っていたのと、あとは乗り物が好きだったから、新幹線の運転手とか飛行機のパイロットとかになりました。それと、父方の祖父が飛行機の技師だったので、遊びに行くと飛行機のプラモデルを作ったり、モーターや滑車

を使っているのを作ったりして遊んでいました。飛行機の絵も描いていたりもしました。トレーシングペーパーで型を取ってから色を塗って、そういう思い出はあります。  
小学校高学年になると中学受験の勉強漬けになって、そこで勉強をしているうちに、何となく小学校の卒業論文には「医者になりたい」と書いていました。でも格別、今ほど夢や確固たる目標は無かつたかもしれないです。

——中学・高校時代はどのような過ごし方をしていたのでしょうか？  
清水 努力の甲斐あって、中高一貫の学校に入りました。部活は、もともと山に行ったりするのが好きだったので、生物の観察で野外へ行く生物研究部に入っただけで、観察ばかりしているのは性に合わなかつたです。そして、中2になる頃、大森先生という学校を出立の若い先生がワンダーフォーゲル部の顧問になって、元卒業生と



ワンダーフォーゲル部の仲間たち。(中学2年)

を受けたものは何かありますか？

**清水** SFアニメですね。小学校時代は「宇宙戦艦ヤマト」を見ていて、中学では「ガンダム」。結構アニメには浸っていて、SFとか宇宙ものが好きでした。勧善懲悪ではなくて、いろんなキャラクターの人間模様があるような。あの頃はそういう夢のある番組が当たり前のようになっていたのですが、最近は無くなってしまったと感じます。今「宇宙戦艦ヤマト」を夜7時にやっても誰も見ない。「ドラえもん」や「ちびまる子ちゃん」とかないけど、いわゆるSFのアニメはやっていません。とても残念です。我々の子ども時代は、夕方の5時から7時はSFアニメとかそういう番組ばかりで、みんなその影響を受けたと思うのですが。

### 宇宙飛行士を夢見て 医学部へ進学

——先生はSFアニメに影響を受けたそうですが、なぜ、機械系ではなく医学部に進学されたのでしょうか？

**清水** ワンダーフォーゲル部で活動しながら、学校の勉強をして、高2ぐらいまでは将来どうしようとかはあまり考えていなかった、というのが本当の所です。当時、僕の通っていた高校では半数以上が医学部に進学していたのだけ、そういう環境の中で医学部に行くことに對して、自分

## 宇宙飛行士になりたいと思い、 関連の本を買って読んだことがありました。

は特別に何か考えてはいませんでした。友達とクラブで楽しみつつも、試験になれば単に友達に勝ちたい、あいつには負けたくないぐらいの思いで勉強をしてきて高2まで成長してしまっただけです。

結局そういう環境の中で、医学部を受けることに決めました。ただ、良く覚えていないのですが、当時向井千秋さんが宇宙飛行士になっていて、自分でも本に何がやりたいかを考えたときに、一時、宇宙飛行士になりたいと思い、宇宙飛行士関連の本を買って読んだことがありました。そのときのネックは、宇宙飛

行士になるには視力が裸眼で1.0なければいけなかったということです。自分はその頃には眼鏡を掛けないと見えていなかった、でも宇宙関連に行きたいので、やはり宇宙工学かなと。でも、母親には、テレビの見過ぎだとはなっから否定されました。それで母親と思いつきりけんかをしたのですが、冷静に現実を見たときに、やはりすぐには宇宙飛行士にはなれないと考えました。でも向井さんも医師だったので、医師になればまたチャンスはあるかなと思いつき、とりあえず勉強の目前にあることをやろうとい

【宇宙工学】宇宙開発に関連する工学。ロケット・人工衛星の開発や地上と大きく異なる宇宙環境における科学現象の研究など幅広い分野の技術者・研究者が携わっている。

う気になりました。

——勉強の甲斐あって、先生は東京大学に進学されています。大学生活はいかがでしたか？

**清水** どうか無事東京大学へ入って、クラブはサッカー、サークルはテニスをやっていました。それから家庭教師のアルバイトでお金を貯めてバイクを買いました。やはり乗り物に乗りたくて。サッカー部の仲間と北海道ヘッソーリングに行ったり、試合の遠征にみんなは車で行くところを自分はバイクで行ったりにしていました。

サッカー部ではやはりナンバー2的なポジションで、リーダーのサポート役をしていました。リーダーは変わるけれど、

僕はずっとサポート役でした。

チビでやせっぽちの高校時代からはだいが雰囲気は変わったはずだけれど、モテ期はありませんでした(笑)。まだしゃべらない時代だから、女の子ともあまりしゃべらなかったものです。

### 価値観を大きく変えた 二人との出会い

——大学卒業後、先生は循環器内科の臨床医としての道を進まれ、やがて細胞シート工学と出逢います。その詳細はPart1のインタビューでお聞きしていますが、東京女子医科大学に移られ当時の岡野光夫先生と大和雅之先生、御二方との思い出は何かありますか？

**清水** みんなでおそば屋さんに

行っていた頃が良かったですね。3人が毎日お昼を一緒に食べていました。毎日そこで話をしました。組織としても全部で20人ぐらいなので、毎日朝から晩まで顔を突き合わせているわけで、大和先生に結婚の良さを語るみたいになくならない話から、ラボの運営や将来展望まで、そこで大体いろいろな方針が決まっていたのです。

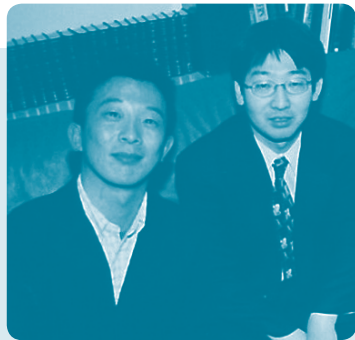
でもこの頃一番印象深く、強く影響を受けたのは、何と言っても大和先生と岡野先生のキャラクターです。2人に



愛車にまたがって。大学時代にはよくツーリングをされていた。



TATSUYA SHIMIZU



最初の弟子である阿久津氏(当時:芝浦工業大学)と。

とですが、窓側から、清水、大和、岡野と座っていて、弁当を食べました。すると岡野先生がトイレに行くときに「ついでに持って行くよ」と奥の2人の弁当方をラを持って行きました。こんなことは医学部では普通あり得ない光景ですよ。むしろ、若手が争って「僕が、私が」と言っていて行くところです。そういう岡野先生の人柄が、私と大和

先生がのびのびやっている所以なのだと思います。そして自分達も所内の人達にはそうすべきだと思うし、そういうのを良しとする人がここに集まればいいのかという気がしています。

——先端生命医科学研究所が大きくなって運営も大変だと思うのですが、様々な分野の研究者を指導することに関して先生のご意見をお聞かせください。

清水 私たちの研究所に集まる研究者は医学、理学、工学といういろいろなフィールドから来ており、いろいろな頭脳や技術を結集できるというのがメリットですが、一方で、なかなか縦のラインを作りにくいという問題があります。グループごとにリー

ダーをつけるにしても、学際的な、新しい研究をしようとしている人たちの指導は本当に難しいです。縦のラインがないと、結局、困ったことを誰に聞いて誰に従えばいいのか判断できなくなりがちです。下手をすれば複数いる上司の方針の板挟みになってしまいます。したがってそのような環境では、本人も要領良くいろんな意見を自分で理解し、自分の中でこなしただで自分で主体的に決断を下していかなければいけません。先生はこう言うけどあの先生はこう言いましたではなく、自分の意思を持って2つの意見を取り入れ、より良いものにして出すぐらいのつもりでいかなければならないのではと思っています。

——とは言え、入ってきたばかりの学生は、先生の意見を聞くことはできても、自分の意見を先生に言うことは難しいかもしれません。

清水 もちろん上に立っているような人は、みんなそれぞれに自分の意見や考えを持ちいろいろな提案をしてくるのが常であり、若い人からみれば正しくまた従うべきものかとえがちですが、それがその人の経験や知識から生まれるある程度の限定的な提案や意見にすぎませ

——寡黙なナンバー2からの大転進ですね。

清水 昔は陰で動く縁の下の力持ちでいいというセンスでしたけれど、やはり自分の主張をちゃんと声に出して言わないといけないの

ていると損かな、まずは自分の思っていることや、やりたいことを『きっちり主張する、言う』ということから始めないと何も始まらないのかな、と。こう言っているけど、言った者勝ちとかいうか。言わないと、動くものも動かない。そういったことが2人から学んだ大きな点、そして、自分が大きく変わった点です。

## 言った者勝ちとかいうか。言わないと、動くものも動かない。

かなと思いました。それで僕はいろいろな意見を言うようにしているし、周りにも意見を言うようにと勧められています。ただみんなあまり言わないのではないのでしょうか？ 自分の思っていることを言わない。そこは日本人の良いところでもあり、欠けているところでもあるので、場所や年齢とかは関係なく、自分の意見を言えるようにしておくのは大事だと思います。日本だと偉い人だけが言うから、偉い人の言う通りにいろんないろんなことが進んでしまいがちです。学生でも若手でも必要なことはちゃんと主張できるようにしなければ



岡野先生、大和先生と3人で当時よく食べに行ったおそば屋さん。ここで様々なことを語り合った。

いけないし、上司はそういう主張をちゃんと柔軟に受け入れる姿勢を持つことが必要だと思います。岡野先生、大和先生がまさにそれで、部下の意見を聞き入れてくれます。もちろん専門的なことで間違っていたら、否定的に言うこともあるかもしれませんが、基本的に聞いてくれます。それが、基本的なことです。

——他にも印象深いエピソードはありますか？

清水 そうですね、岡野先生と初めて新幹線に乗ったときのこ



## 座右の銘「夢と信念」 清水達也



先生の座右の銘「夢と信念」はどこから来ているのですか？

僕は祖父をと

ても尊敬しています。戦時中、新明和という

会社で飛行機を作る技師をしていて、技師だったから戦争

には行かなくてよかったのだけれど、工場が空爆に遭って右手を失く

すような目にも遭っています。その祖父が会社で偉くなったときに、社員への教育的な訓示のようものを360個作ったのです。それを小さい頃見て、僕もそういうのを一度やってみたいと思っていました。「夢と信念」この言葉を使い始めたのは巴寮にいた頃だから、8年くらい前になるでしょうか。ちょうどハイテクリサーチセンターを作って、僕のチームのメンバーが増えたときで、時期もお正月、これは良いタイミングだと、年末から何か良い一言をとって考えたわけです。もともと

と夢というのはずっと自分が大事にしてきたもので、さらに夢を見るだけで

はなくて、信念を持って叶えるということで「夢と信念」。そしてうち

の家内にこれ(写真参照)を書いてもらって、年明けみんなの

前で「今年はこれです」と発表しました。それ

から愛用しています。

——宇宙への思いは今もお持ちでしょうか？  
清水 宇宙医療というテー

ん。だから、若い人が逆にそれを利用して、いろいろな意見や考えを吸収して逆提案をするぐらいの気概をもってほしいものです。それがこの研究所の理想とするところではあります。なかなか難しいとは思いますが。大和先生や僕はわりと、そういうふうをやってきたつもりです。もともと、それができたのも岡野先生がある程度私たちを尊重して自由に意見を言ったり研究させてくれたりしたおかげだと思っています。

## いろいろな意見や考えを吸収して 逆提案をするぐらいの気概をもってほしい。

マも、再生医療をやりながらやっていきたいなという思いはあります。これはこじつけではなくて、今、将来人類は火星に住むなどと言われていますが、もしそうなったらそれこそ、宇宙で病気になった時に病気になる組織・臓器をパーツとして取り替えるといった時代が来ると思います。それから食料についても、細胞から食糧を作るという開発が最近出てきています。そこで細胞シートや、ティッシュエンジニアリングの技術を食糧供給にも転用することができるともいれませんが。そういった観点から、「宇宙医療」と思っ



清水達也(しみず・たつや)

1968年生まれ。1992年東京大学医学部医学科卒業。臨床並びに分子生物学的研究に従事した後、1999年より東京女子医科大学先端生命医科学研究所にて心筋再生の研究を開始。2011年同大教授に就任。専門は循環器内科、再生医工学。

ています。将来、絶対にそういう世の中が来るので、そのバイオニアとはいませんが、生きている間にそういうものとかかりとなる研究を始めてみたいと思っています。もちろん宇宙にはいつてみたいです。

## 夢のエンジニアから サイエンティストへ

——まずは、先生の小さい頃の夢からお話していただきたいと思います。やはり、医者や科学者といったものでしたか？

**松田武久（以下、松田）** 実はサイエンティストではなくて、エンジニアでしたね。小さいときから、実験することが大好きだったんですよ。何かでお駄賃をもらうと、それを貯めてアルコールランプを買ったりしていました。僕は小学3年生で塩酸まで持っていたよ（笑）。「大事に使いや」と言われて。水の中にダーツと垂らすとバリバリと鳴ったりする。危ないけれども、そういうことをやっていた。お

ぶくろは「変わった子だな」と思っていたでしょうね。

——好奇心から危険をものともせずに……。

**松田** 薬学出身の父親が大学のときに使っていた実験書が本棚にあって、そこに書いてあることをやりたかったんです。ニンヒドリン反応とかね。それから、小学5年生の担任の先生からの影響もあったのかな。ちょうど大学を出た直後の若い先生で、こういう実験をしたら呈色反応がこうなったとか、よく話をしてくれました。原理が分かっていた実験をやっていたわけではないんです。マジックを

研究者たちの素顔

Vol.03

松田武久

Interviewer:

村岡・秋元・田村・杉林

# 失敗があっても その先に『何か』ある だから人生は面白い

日本におけるバイオマテリアルの世界を

支えてきた松田武久先生は、

研究者として日・米の大学、企業の両方の立場で

数多くの業績を残してきました。

化学と生物が嫌いでエンジニア志望だった

松田少年が『研究者』になるまでの

道のりを辿ってみました——

披露するようなもので、友達の前で「色が変わります」と言つてバツとやつたら牛乳の色がサーツと変わる。それが面白かったんですね。

——中学・高校と成長されてからはいかがでしたか？

**松田** 中学生のときかな、後に僕の師になる福井謙一先生（京都大学）の業績が京都新聞に載ったんですよ。数学で化学反応を解き明かすという内容で、1962年、37歳で日本学士院賞を獲られた。その後、1981年にノーベル化学賞を獲られたことはあまりにも有名ですよ。僕

が中学・高校生の頃は、化学が大嫌いだったんです。覚えることばかりでしょう。生物もそうですよね。葉っぱの種類とか、〇〇科の××とか、何て面白くない授業だろうと。高校の生物の授業のとき、教室の後ろでガアガア言っていたら、先生に「ちょっと来い」と連れて行かれて、「お前、60点をやるからもう授業に出てくるな」と言われたんですよ（笑）。今の生物はDNAの話とか面白いと思うけれど、あの頃はそうじゃなかったですよ。英語の単語を覚えるのだって、「何だこれは？」と思っていました。

一方で、自分で言うもの何だけれど、数学はものすごくできた。好きだったんですね。例えば、幾何で補助線をどこに引くかというのがあったでしょう。あれを考えるのが面白かったですね。そういうわけで、『考えるのが好き、覚えるのは嫌い』というはつきりとした志向と、子ども時代の実験もどきで遊んだ体験から、「化学反応が数学で解けるというなら、大学に入っ

て勉強するのは新聞で読んだ福井先生のところだろう」と思うようになったわけです。

——運命的なものがありますね。

**松田** 当時の僕はエンジニア志向でしたから、「サウジアラビア辺りに行って石油化学をやりたい」と思っていました。夜も煌々と灯りがともる銀色のプラント、そこにヘルメットをか

## 中学・高校生の頃は、化学が大嫌いだったんです。



ぶって胸を躍らせる男……、そんなイメージですかね。それで、京都大学工学部の燃料化学科に入りました。

同じ学科の同級生が30人いたんですが、そのうちの15人が福井先生の講座を希望して集まってきました。「就職が難しいから」とか何とか言って、だんだんと減っていき、最後は6人になったんです。でも、定員枠には1人多いですから、減らさないと駄目でしょう。今でも思い出しますが、時計台の下の芝生のあるところで、あみだくじをやったんですよ。人生をそれで決める（笑）。その後、福井先生にあいさつに行ったら、「松田君は、いったい何のために来るんですか？」と聞かれてびっ

くりしました（笑）。

——それはどうして聞かれたのでしょうか？

**松田** どうしてなんだろう（笑）。福井先生に「大学院に行く」と伝えたときも、びっくりされてしまったね。「大学院には行かないほうがいい」と言っ

マスターコースで卒業就職したはずが…

思ってたね。

**松田** そうこうしているうちに、僕がついていた助教の先生が、別の研究室の教授に昇格したんですよ。そして、僕の家まで来て両親を説得したうえで、「松田君、ドクターコース（博士後期課程）で帰ってきたまえ」と言う。そうしたら、会社との三角関係でややこしくなってしまうって、「それじゃあ、僕はドクターコースに行きます」と言いました。「大学に戻ったら、すぐ助手になれ」とも言われたけれども、僕は転職をしないというので会社に説明してきましたから、と。大学紛争の時

世でしたが、ドクターコースを出たら世界のどこにでも行けるライセンスを得るようなものでしょう。それでアメリカへ行くことにもなったわけだけども、でも、こうしてドクターコースに帰ることになって、福井先生にはものすごく怒られました。「僕は君を推薦したんだ。推薦状を書いたのに、こんなに短い期間で帰ってくるとは何ごとだ」とね。

——三井化学には何年いらっ

しゃったんですか？

**松田** 1年です。

——それでもう1回京大に戻ってドクターですか？

**松田** そうです。だから、もの

すごく怒られましたよ。極めてキツかったですね。でも、それは当然だと思いましたよ。福井先生の家にそのことを報告に上がったときは、しかられはしませんでしたけれど、『お客さん』として扱われました。僕を床の間のほうに座らせ、帰るときには額を畳にすりつけんばかりにして「お忙しいところを来ていただきまして」と……。今思い返しても冷や汗が出ますね。

それからなかなか許してもらえなかった感じでしたが、あるとき状況が変わりました。福井先生は京大で心臓内科の先生にかかっていたんですが、その先生が福井先生に対して、「先生のお弟子さんで、国立循環器病センター（現在の国立循環器

病研究センター）で人工臓器をやっている人の講演を聞きまして」と言っ、ほめてくれたらしいんです。福井先生はそれを見ていたく心にとめてくださったって、それからちよつと風向きが変わったんじゃないかな。

例えば、正月の3日には、福井先生の北白川の大きなお宅に教え子たちが集まるんですが、そのとき誰かが福井先生に、「先生（ノーベル賞）に最も近い人は誰ですか？」と尋ねた。その場には僕もいましたが、ほかに東大や京大の教授になっている人もいるわけですよ。それぞれが「おれかな？」という自負心があったと思います。そうしたら、チラッと僕のほうを見て、「それは松田君だろう」とおっ

大学院の試験を滑ったからといって、人生はそれでおしまいではないんですよ。

大学院に進むときも大変でしたね。何しろ30人の同級生のうち、学部を卒業して就職するのは3、4人なんです。だから、26、7人がマスターコースを受ける。受かるのは18人ですから、大学入試験より難しいと思いました。





今の僕くらいの年齢になったら、「この人は将来伸びるだろうな」とか、「この人は将来ここでおしまいかな」とか、積み重ねてきた人生経験から、ふつと分かるようなところもありますね。40歳代では、まだ分からないですね。走っている最中から、分かってくるでしょう。まあ、みなさんも頑張ってください(笑)。

——何かに行き詰ったとしても、まだまだということですね。

**松田** そう。それが人生の面白いところじゃないですかね。そう思いますよ。

——学生時代の印象的なエピソード

ないというのがなかったんです。僕が渡米したとき、大学1年生時の同級生のうち、7人がポスドクでアメリカをうつっていました。27、8歳の頃です。

——国内でポジションを探すというお考えはなかったのでしょうか？

**松田** それはなかったですよ。当時、大学における空きポジションは極めて少なかったですね。大学という組織において、ポジションが増える機会というのは、そんなにたくさんないんですよ。以前、国立大学法人に移行した際には、ドカッと増えましたけれど。そういう流れに乘れた人はラッキーですよ。ポジションが増えたときは人が足

ソードを教えていただけじゃないでしょうか？

**松田** 僕は大学で量子化学の研究室に入っただけです。膨大な計算が必要な分野ですが、そのときはコンピュータがなかったんですよ。だから、タイガー式の卓上回し式計算機を使って、ハンドルをガラガラ回しながら計算するわけです。現代の方は知らないと思うんですが(笑)。

——想像が付きませんね(笑)。

**松田** ハンドルをガラガラと回して「チン」と鳴って計算結果が出てくる。それを書きとめる。その繰り返しなんです。家に帰ってもやらないと間に合わないですね。そうすると、隣で兄貴が寝ているから「やかましい」

と言われて、布団の中でやっていましたよ。本当に大変でした。

僕がマスターコースの終わりにぐらに、東に1台、西に1台というかたちで、京大にようやくIBMのコンピュータが導入されたんです。FORTRANという言語が使われていました。

当初、FORTRANのコードはテープに打ち込んでいたわけですよ。間違えたら、また初めから。その次にはカード式になって、カードを1枚ずつパンチしていった。そして、パンチしたカードを受付に提出して計算してもらったのです。1000枚ほどの束を渡して、1枚でも間違っていたら計算できない。そのうえ、「特急」と「急行」と「鈍行」に分かれていて、料金が違

うんですよ(笑)。こんなんでいいのかなと思ってね。

ドクターコースまで量子化学的なテーマを続けていったんですけれども、今のうちにコンピュータ全盛の時代からは考えもつかないような、いろいろな困難がありましたよ。

### 国内、海外、どちらもポジション探しが大変

——先生は博士号取得後、ポスドク(博士研究員)としてアメリカに渡られました。そのときどのような思いでいらったのでしょうか？

**松田** 誰々に師事して研究したいというのは違って、当時はポスドクという制度が日本にはなかったから、アメリカに行か

りないから、30歳代の後半でも教授になれる可能性が高くなります。

僕の同級生で、いろいろなところの教授になっている人でも、教授になったのは52、3歳くらいですよ。僕が教授になったのは54歳かな。僕は国立循環器病センターから移ったから少し異なるけど。40歳代で教授になっている人は、あまりいませんでした。ところが、僕の研究室の准教授は、37歳で九州大学の教授になっています。

ところが、その後に続く人はしんどい。37歳の人65歳まで教授であるとなると、その間にポジションが増えなかったら、30年近くも教授のポジションを1人で占めることになるわけ

す。これは極端な例かもしれないけれども、今にしてみれば、

僕らの頃もそういう時期だったなと思います。僕らの年代で教授になるのが遅れたのは、そういうことだったんだと思います。だから、大学の制度が変わる時にたまたま遭遇するとラッキーですが、タイミングがベストで、逆にその後しばらくは反動がくる。その意味で、今の若い人はかわいそうですね。

僕らの頃で日本に残るといいう人は、<sup>\*</sup>オーバードクターということで、昼間は予備校の講師か何かをやって、夕方から大学に出てきて実験室でアルバイトみたいなかたちでやっている、そ

ういう人が多かったですね。

——海外に出ても国内に残っても大変だったということですね。

**松田** そう、海外に出たって楽ではありません。海外に出たら、元の教室の先生に宛てて一生懸命に手紙を書くわけです。「こちらではこういう研究をやっています。そちらでポジションはありますか？」と。あまり手紙を書かないでいると、「あいつはアメリカの生活でゆつたりしているんだろう」ということになる。だから、3か月に一度は書く。先生が学会でアメリカに来るといふのなら、自分の大学に寄らなかつたとしても、

【<sup>\*</sup>オーバードクター】博士号を取得しながら定職についていない人



TAKEHISA MATSUDA

ニューヨークならニューヨークまで会いに行くとか、僕の友達はそのんことをよくやっていました。僕は1回もやっていないけれど(笑)。

そういうふうには厳しかったですよ。でも、あまり悲壮感はなかった。だって、社会全体がそんなに豊かではなかったわけです。今は社会が豊かになったから、大会社に入った人は給料が高くて安定している。僕らの頃は、ポスドクをやっても裕福ではなかったけれども、今みたいには差はないですよ。それはある意味ラッキーなところもありますね。だから、あまり絶望とか、こんなくしょとか、そんなことは思わなくて、自由に研究させてもらっているからいいかと

いう、そんな感じでした。

——アメリカでのご所属は、どのように決められたのですか？

**松田** どこに応募しようかと思って、『Journal of Polymer Science』という専門誌を1冊パラパラとめくってね、論文のクレジットの末尾にある名前が教授だろうと当たりをつけて、それで4人に対して書類を送りました(笑)。

その一つがケース・ウェスタン・リザーブ大学(CWRU)・オハイオ州クリブランド)というところなんですが、『聞いたことのない、おかしな名前だな』と笑。でも、実際に行ってみて感心したのは、こちんまりした大学ですがノーベル賞受賞者

を4人輩出しているんです。

——向こうではかなり有名な大学ですね。

**松田** 当時、高分子学科というのは全米で2つしかなかったんです。そのうちの1つがここです。正確にはまだ学科ではなくて、グループという感じでしたけれど。そこから「ぜひとも来てください」と連絡をもらいました。うれしかったですよ。

当時はNASAが月を目指すのをやめるということでした。皆さんの研究者がレイオフ(集団解雇)されていました。ロバート(博士)がタクシーの運転手をしている時代。そんなときに、わざわざ外国から呼んでくれた。それでオーケーしたんです。

すが、それから1週間して、カリフォルニア工科大学のジェット推進研究所というところから招待がありました。医用材料やドラッグデリバリーをやっているところなんです。その次には、ノースカロライナ大学からも来て、結局、4通の応募に対してすべて招待をもらいました。でも、最初のCWRUでオーケーしてしまったからね。それが結果的にはよかったんですが。

——先生はポスドクとしてCWRUに在籍されましたが、その後は？

**松田** 近年、日本でもポスドクの期間が長くなっていますが、僕がアメリカにいた頃は、ポスドクは2年がマキシマムだと言

われていたんです。つまり、2年以内にアシスタント・プロフェッサーの道に進むか、企業に就職するかのどちらかということになる。あるとき、教室のチエアマンが僕に、「お前はどの先どうするんだ？」というから、「2年したら日本に帰る」と答えました。そうしたら、考えを改めて残るようにと引き止めてくれ、いくつかの会社を紹介してくれたんです。その中でアットホームな雰囲気だったローム・アンド・ハース社という会社に入社して、ペイントの増粘剤の研究をしていました。僕に対する会社の評価は高かったんですが、国立循環器病センターの研究所長(当時)だった岡小天先生に誘っていただき、

帰国することになりました。やはり英語の面でしんどかったんです。30歳くらいから英語力を伸ばそうというのはなかなか難しい。

——当時、周囲に日本人研究者はいらっしゃいましたか？

**松田** CWRUにいましたね。クビを切られるポスドクがいる中で、日本人は頑張っていました。朝から晩まで一生懸命やって、土曜・日曜まで出てきてね。雪の日の夜なんかは工学部で電灯がついているのが見えるな」というもんですよ。当時は全学で8人の日本人がいました。早稲田や東大から。その8人のうちの2人が、今でも現

役で京大と阪大で、副学長をやっていますよ。8人のうちの2人だから、すごい確率じゃないですか。みんな死に物狂いでドクター論文を書いたりしていましたね。

——女性の方もいらしたのでしょうか？

**松田** アメリカに留学しようという人で、クリーブランドに行こうという物好きは、特に女性ではないでしよ。カリフォルニアやニューヨークなら語学留学の女性も多いでしょうが。クリーブランドは、かつては製鉄所やメロン財閥なんかがあった栄え、それから寂れていった場所ですから。エリー湖岸の錆ついた製鉄工場の横を、

——映画のワンシーンみたいですね。

**松田** そうそう。金沢もちょっとクリーブランドと似ているところがあって、あのときの光景。あのときの雰囲気、温度や湿度。風の強さ、地面に這うような雲の形、そんなあれこれを、ふつ、と思ひ出すときがあるんです。みなさんも、できるだけいろいろな土地で過ごしたほうが人生は面白くなると思いますよ。

米国企業に勤めて  
感じたこと

松田武久

アメリカのワークライフバランス



アメリカでは、仕事よりも家族や夫婦の仲を大切にするという思想が徹底していました。

僕がアメリカの企業にいたころ、会社でレポートを見て残業していたことがありました。残業といっても定時が16時半のところを17時半ごろまでいただけなんです。ところが、警備員が何度も様子を見に来るんですよ。おかしいと思ってパッと駐車場を見たら、大きい駐車場にほとんど車がないわけです。「あれっ」と思ってね。そんな感じで、2週間ほどしたら部長に呼び出されました。何かと思えば、「仕事は難しいか」と聞くのです。僕はこのとき、アメリカの大学で高分子をやっていたよかったなと思っていたんですよ。高分子について、僕はちゃんと知っているけれども彼らは知らない。なにせまだ高分子化学の学科がほとんどないんですから。だから、企業に行ってみーティングに出ても、この程度だったらいけるなと思っていた。僕にとってそこでの仕事は、別に難しくもないわけです。ですから「No problem」と言った。すると「おまえ、ずっと6時ごろまで残っているじゃないか。それじゃ夫婦の仲が悪くなるから、ランクを落としてもっと楽な仕事にしようか」と言うわけです。始めは何の話が分からなかった。同じアメリカでも、大学では夜中12時、とか1時、2時までやっていても、誰も何も言わないのに。そう伝えと、「ここではそんなことをする必要ない。家族と楽しく、平和に過ごす事を大切にしろ」と。ホーッと思いましたね。

これは、残業に限った事じゃないんですね。例えば、向こうでは年に1回、給料の査定があった。会社から「おまえはこれだけのことをやったので、給料を10%上げ

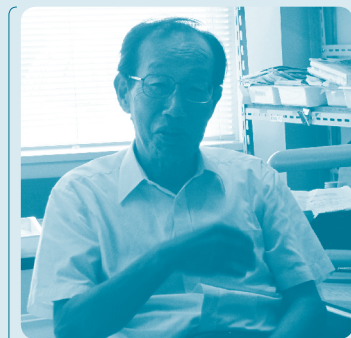
る」と言われたので、僕は「Thank you very much」と答えたわけです。すると、向こうは拍子抜けしている。なぜ何も言わないのかと。普通はここで、俺はこんなことをやったし、あんなこともやった、だからこれではまだ少ないとかって1時間も2時間もしゃべるわけよ。そして最後は「家内と話す」と言う。そこで僕にも「奥さんはどう言っているか」と言うから、「10%上がって家内もハッピーだと思う」と答えた。すると、「そんなこと分らないよ、もっと要求するかもしれないじゃないか。帰って奥さんとディスカッションしろ」と言われた、僕は「いや、これでいい、サインする」と言ったんだけど、再び止められた。金額の問題だけでは無いんだと言うんだね。つまり、お給料が上がるということは、それだけ責任も食うことになる。そうすると、仕事のために夜も勉強すると、休暇中でも大きい旅行かばんに会社のシークレットのレポートを持っていくような事になるのだと。夫がそんな働き方をする事について、奥さんのオーケーを取らなければ駄目だと。ランクが上がることによってプレッシャーが掛かり、夫婦仲も重要になるからと。

そんなわけで、夏には16時で仕事を終えたあとシャツを着替えて、子供たちと家内が行っている近くのプールに海水パンツのまま行っていました。そして、家内は18時ごろに帰って、僕は21時くらいまでは外が明るいので、19時か20時ごろまで子供たちを見ている。そんな優雅な生活でした。それが日本に帰ったらご承知の通りでしょう？ 初めは「ええっ」と思いました、日本の社会はこんなだったなと。でも3日で慣れましたね。忙しくなると、気が付けば0時とか2時なんですよ。

最後に、若手研究者へのメッセージをお願いします。  
松田 そうですね。あまり人の言うことを聞かないほうがいいかもしれないね(笑)。明らかに間違っているという以外は、今までの常識の中で評価するのはよくないでしょうね。岡野光夫先生の細胞シート工学だって、「そんなのは意味ないだろう」という声もあったのに、あれだけ大きな展開とインパクトのある立派な研究分野を樹立されたでしょう。片岡一則先生(現・東京大学教授)の高分子ミセルの話だって、「あれは絶対に肺の毛細血管のところで詰まるよね。片岡さんは知っているのかな？」なんて評価もありました。けれど、世界に先駆け

るドラッグ・デリバリーの分野を大きく拓いている。だから、簡単に「イエス」とか「ノー」とか、「駄目だ」とか「できる」とか、そういうことを言うべきではないなと思ったよ(笑)。それまでは、岡野先生にしても片岡先生にしても、いろいろと大きな研究費をもらって研究してきても、最先端の分野での取り組みだから、うまくいかないほうが多かったと思います。ところが、2人とも、2塁打どころかホームランを打っちゃった。岡野先生自身がそう言っていたね。僕が「2塁打か3塁打じゃない？」と言ったら、「いや、ホームランです」って(笑)。

だけど、それは同業者としてうれしいことです。そういう



松田武久(まつだ・たけひさ)

1968年、京都大学工学部燃料化学科卒業。  
1968年三井東圧(現三井化学) (株) 技術研究所に入社後、1972年、京都大学で博士号を取得。  
その後、渡米し、ケース・ウェスタン・リザーヴ大学で博士研究員、米国無機化学メーカーのローム・アンド・ハース社の中央研究所で研究に従事。  
1980年、設立されたばかりの国立循環器病センター研究所人工臓器部に研究室長として就任。  
1998年、九州大学大学院医学研究院医工学分野教授、2006年、全沢工業大学のゲノム生物学研究所教授に就任。

ことが2つ、3つ、4つと出てこないで、こういう分野は社会から消されていくと思うよ。だから、こういう研究をきちんとやっていくと、こういうふうに研究分野を創出して社会に還元されますということを、常にアピールしていく必要があると思います。





MITSUO UMEZU

鉄道の研究を志して  
機械工学科に進むが：

——先生はどのようなお子さん  
だったのでしょうか？

梅津光生（以下、梅津）僕は子ども  
のころから大型の自動車や電車  
が好きで、生まれたころから家  
の近くにバスが走っていたこと  
もあってはじめはバスが好きだ  
った。当時はボンネット型のバ  
スのバスだから、エンジンはす  
べて個性があつて、エンジンの  
音を聞けば、いすゞのバスだか  
、三菱ふそうのバスだかみんな  
分かったね。もう少し大きくな  
ると、今度は鉄道に興味が出て  
きて、小学校4年生の時には、  
鉄道時刻表の虜になって、東海  
道本線の駅名は全部覚えてしま

た。そんなことがあつたら  
ら大学では鉄道をやってい  
る研究室に行つて研究した  
いと思つていた。それで土  
屋喜一先生の門を叩いたん  
だ。

——土屋研は鉄道の研究を  
なされていたのですか？

梅津 土屋喜一先生は流体  
の制御がご専門だった。新  
幹線の関ヶ原の消雪装置、  
雪を吹き飛ばすスプリング  
ラー、あれを作った人なん  
だよ。それが鉄道技術研究  
所と一緒にやつた研究で、  
僕はそのことを知っていた  
から、その研究室のゼミに  
入ると鉄道の研究がいっぱ  
いできるのかなと思つてい

## 人の体は流体の回路だと悟って この分野に入ることを決意した。

た。でも、実際入つてみた  
ら、もうそのプロジェクト  
は終わったと言われて、は  
しごを外されてしまったん  
だ。

——鉄道の夢を諦めて、医  
学の研究に進むのですね。

そこにはどういった経緯が  
あつたのでしょうか？

梅津 土屋先生は、機械学  
会4万人の会長もやったこ  
とのある機械工学で著名な  
先生だったんだ。その先生  
が、「これから医学の時代  
が来るから、工学と医学を  
一緒にやるんだ」と言われ  
てね。振り返れば、土屋先  
生は日本のバイオエンジニア  
リングの草分けの人だつ

研究者たちの素顔

Vol.04

梅津光生

Interviewer

村岡 松浦・佐久間（東京理科大学）

# 人生も研究も フレキシブルに 楽しむ

大好きな鉄道の研究をしたくて機械工学科に進む

プロジェクトが終了し鉄道関係の研究を諦めざるを得なかった：

挫折からスタートした梅津光生教授の研究人生

しかし、恩師の一言と柔軟な考え方で、

その後を左右する大きな決断をする――

梅津先生に若手の頃を振り返っていただきながら  
研究者として大切なことについて語って頂きました。

ただ、そういう考え方は面白い、  
それだったらやってみようかな  
と決意した。そうしたら、その  
次の日から、東京女子医科大学  
心臓外科で有名であつた榊原  
先生との共同研究に参加するこ  
とになったんだ。

女子医大に育てられ  
やがて大阪へ：

——東京女子医科大学ではどの  
ような研究をなさつていたのだ  
でしょうか？

梅津 僕が、女子医大に連れて  
行かれた矢先、犬を使った実  
験を手伝われたんだ。僕は犬

【流体制御】液体や気体などの流体を用いて、設計した回路に基づき、機械にある操  
作をさせるための制御方法。人体においては心臓のポンプとしての働きのほか、血  
管やリンパ管の弛緩・収縮や弁の開閉が流体の動きを制御し、生命活動を成立させ  
ている。

が大好きだから、それがトラウマになって、途中でもう辞めようかと思った。だって、麻酔をかけて、あとはもう、それっきり二度と目が覚めないこともあるし体力が弱っていて麻酔をかけるだけで死んでしまう犬もいた。これでいいのかなと思っただ。それで、動物実験を完全になくすることはできなくても、9割減にできるテクノロジーを何とかつくり出さないと考えたんだ。

その考えを基に、早稲田の修士の学生だったときに、人工心臓をテストする時に使えるような血液循環系を模擬する流体回路を作った。そしてあるとき、そのデータを持って榊原先生が主催していた「あんばん会」と

いう心臓の勉強会に行つて、自分のやっていることを話した。そうしたら、第一線の医学部の教授たちが「これは面白いぞ。きつと臨床医学に役に立つからどんどんやりなさい」「これを続けていれば医学博士も取得できるぞ」と。

でも、実際、博士の学生となるために早稲田大学の入学試験の面接を受けたんだけど、そのとき理工学部の教授には「犬の実験だけでは工学博士は取れんぞ」とも言われた。僕もそれは分かっていたのだけれど、女子医大の先生の後押しもあったから、やろうと思った。

僕には、自分が全く違う領域をやろうと思ったときに、「面白いからやれ、やれ」と言っ

くれるサポーターがいたんだ。当時だったからできたことだけど、病院の中でカテーテル治療をする部屋に行ったり、手術室にも自由に入れたし、カルテでも何でも見られた。それで、専門の言葉が分からなくてもみんなが快く教えてくれた。そういう非常に温かい女子医大の環境の中で、僕は育てられたんだ。

それからどのような経緯で大阪に異動したのでしょうか？

梅津 博士課程の時に、成果がまとまったものを生まれて初めて国際学会で発表したんだ。そうしたら、それを『白い巨塔』の財前先生モデルといわれていた大阪大学の曲直部（まなべ）寿夫先生がたまたま学会の会場

で私のプレゼンを聞いてくれた。彼は、僕の発表を聞いて「こんな面白い話を聞いたのは初めてや。これからは、医学は工学と一緒にやらないといけないということがあった。

今度大阪に国立循環器病センター（現・国立循環器病研究センター）という国の大きな施設がオープンする。そこには研究所も作る。そこで一緒に働かんか。」と言ってくれた。それで僕は大阪へ行くことを決意したんだ。実はそのとき、関西の女性とあるところで出会いがあった、お付き合いをしていた。それが今の妻になるんだけど、新幹線がなかったら、僕は結婚していなかったよ。新幹線というものが僕の人生にとって大事な

要素なんだ。

## 結婚と就職と—— 苦しかった駆け出しの頃

——大阪でプロの研究者としてスタートしたんですね。この時に先生はご結婚なされたと伺いました。

梅津 ドクターの学生も三年目になって、3つのことが同時に重なったんだ。博士論文を仕上げるとのこと、就職を決めること、そして結婚をすることだよ。当時、国立循環器病センターは病院が開設されたばかりで、研究所はまだなかったんだけど、そこで就職して研究するにあたって、できることから順番にやろうと思った。博士号はまだ論文を書けなかったから見

送って、まず結婚をしてしまおうと思った。当時うちの家内は兵庫県の伊丹に住んでいたのだけれど、2人で箕面というところ

に転居したんだ。でも、当時はお金がなくて本当つらかった、アパート代とか、どうやって生活していこうかというところから始まったからね。

でも、もっと大変だったのが、お医者さんとエンジニアの待遇の差だった。同じ時間働いても、医師とエンジニアでは給料が全然違うんだよね。しかも、当時はまだお医者さんは国家公務員でも週末に外の病院を手伝いに行くアルバイトなんかできなかった。ところが僕はできない。だって、週末に医師がいないので、僕らが土日に当直をやるん

——辛くて辞めたいと思っただけじゃないのですか？

だよ、ヤギの当直を。

梅津 辛かった、でも、そんな苦しい中で過ごしながら、そのときに励まし続けてくれた人がいたんだ。それが病院長の曲直部先生。先生は朝、公用車で来て、病院の前ではなくて、研究所の前につけるんだ。研究所の7階が僕の実験室だったんだけど、月曜日の朝になると曲直部先生が「おはようさん、どうや」と言っ

## 楽しまないとだめだね。 人にやらされていると思ってはだめだ。

弱ってしまうことが多かった。そうすると夜中、ほとんど寝られないんだよ。土日なんかでも、ヤギの状態をギリギリで保ってお医者さんが来るのを待っていたりして、本当に大変だった。一通りそんな実験の話をした後、帰り際に先生は「すまん。君がこうやって週末も一生懸命やってくれているのをわしはちゃんと知ってるんやけど、厚生省（当時）に掛け合ってもどうにもでけん。でも君はね、ここにいることで、将来とてもいいことが起こるような気がしてならんや」といつも言ってくれていたんだよ。僕もね、大変



MITSUO UMEZU

※  
Victor Chang 先生が国民栄誉賞を取った人だったおかげで、特別に計らってもらって、入れてもらえたんだ。そうしたら、中にいる人たちは本当に上流の人たちばかりだったから、毎週、いろいろな家のパーティーに呼ばれたりして、そうすると付き合いが広がっていった、みんなは僕がどんなことをやっているかを知ってくれた。そして、僕がたまたま向こうの雑誌に出てしまったことがあったんだけど、住んでいた Pines Street という道の端っこにあった News Agent（いわゆる「よろずや」）さんで、新聞を売っているような所（のおばさんがそれを売つけて、「あなたはこのストリートの誇りである」と

だけど別に嫌ではなかった。とにかく、楽しくやらなければいけないと思っているから。どんなところでもそうだよ。楽しまないとはだめだね。人にやらされていると思っただけだ。自分で楽しいことを見つけていかなければ。

### 嫌なことがなかった オーストラリア留学

——先生はその後、オーストラリアに留学されましたよね。  
梅津 最初に行ったのは1986年。35歳ぐらいのときだな。面白いのは、岡野光夫さんも当時、海外にいたんだよね。彼はユタで、2人とも全く違うけれど。彼とは同時期に学生時代を過ごしたんだ。その後、循

環器病センターで人工心臓を作ったときのポンプ室の血液接触面のコーティング材料に、岡野さんの作った抗血栓性のものを使った。それで良いものが出てきたわけだ。そういうことで、昔からいろいろ付き合いはあったな。

——オーストラリアではどんな研究をされていたんでしょうか？

梅津 僕はオーストラリアで、人工心臓のプロジェクトリーダーをやっていた。日本人は1人だけだったから、英語を話せないとしようがない。だから、朝、通勤電車の中で1日1個ぐらい英語で冗談を考えていったり、前の人の読んでいる新聞を

言って、みんなに紹介してくれたりもした。とにかく本当に嫌なことは1個もなかったね。

——差別のようなものはあったんでしょうか？

梅津 もちろん、古い言葉だけれど白豪主義というのは実際にあった。でも幸運なことに娘の学校では、日本人はうちの娘だけだったこともあって、みんなが娘のことをかわいがってくれた。家内はというと英語があまり話せなかったんだけど、子供を車で学校に送った後、お母さん同士のお茶会によく誘われていたらしい。そこで、「Takako Doiが日本のPrime Ministerになったら日本はどう変わるのか」とか聞かれて困って帰って

見て、分からない単語があったら、全部メモをするなんてこともしてたんだ。それでもとにかく分からないことだらけで、とても大変だった。

でも、1人だけというのは逆に良かった。当時、日本というのはものすごく評判の良い国で、オーストラリアで一番のフレンドリーな国だったわけだ。当時最大の貿易相手国は日本だったし、第2外国語はみんな日本語を勉強していたんだ。

——ご家族も一緒だったんで

【Dr. Victor Chang (1936-1991)】オーストラリアにて活躍した心臓外科医。心臓移植技術の先駆者と呼ばれ、オーストラリア初の国立心臓移植センターをセント・ビンセント病院（シドニー）に設置したことも知られる。センターでは心臓移植197例、心臓移植14例を執刀し、90%以上の成功率を誇った。同時に、人工心臓弁や人工心臓の開発にも熱心に取り組んだ。1986年、Companion of the Order of Australia (AO) 受勲。

きたこともあったよ。そんなの日本語でも答えられないと言っていたけどさ（笑）。

### オーストラリアで 学んだ大切なこと

——オーストラリアにいったからこそ得た経験というのはありますか？

梅津 僕は本当にいろいろなことを向こうで勉強したよ。娘の学校の教育でびっくりしたのは、学期末に、娘が何も書いていない成績表をもたらしてきたわけ。娘は初め英語が全くできなかったのだけれど、そのうちクラスのリーダーになって、けんかの仲裁をやっていると先生が笑って教えてくれた。そんな娘が、これはお父さんかお母さんが書く

しょうか？

梅津 それはもちろん。うちの息子は小学生だったのだから日本人学校に行っただけで、そこは世界で2番目に大きくて、さらに日本人とオーストラリア人の両方の子供が入れるという特別な日本人学校だった。娘はまだ幼稚園だったので現地の学校に行っただよ。現地の学校もブライベートスクールで、普通は生まれたときに登録をしないと入れてくれないところだったのだけれど、セント・ビンセントという病院で僕を雇用してくれた

んだと先生が言っていたと言うから、学校に電話をした。そうしたら向こうの先生も笑って、お父さんとお母さんが書くんだと言っわけ。同じ成績表を先生もつけて、2つを比較するんだって。比較して合わなかったところが個人面談のディスカッションのポイントになるんだって。分かりやすい話だよ。

——日本にはない評価方法ですね。

梅津 例えば mathematics に親も先生もCをつけたら、日本だったら「こんなに算数ができなくてどうするの！」とみんなが言うでしょう。ところが向こうの先生の理解は、この子はいま算数には興味がないの





MITSUO UMEZU

で、興味があるときにまたやりたいいいよと、そういう言い方なんだよね。すごいよ。一方、society」というところで僕がCをつけて、先生がAをつけたとするじゃない。そうすると、そこが問題になるわけよ。何でおまえはCとつけたんだと。自分はこの点で良いと思ってつけたとディスカッションになるわけ。評価の度合いが全く違う。本当にびっくりしたな。

他にも、「ニューストレイ」というのがあってね。これは、朝教室の入口にお盆が用意されていて、自分でニュースになりそうなものをそこに置くわけだよ。例えばうちの子が、おひなさまのお人形をぼんと置いたとする。そうしたら、日本では

——先生の場合、どのように学

生を指導されていますか？  
**梅津** 僕は、研究室であまり「一生懸命やれ」とは言わない。でも僕に何か言われたら、ちよつとやってみようかと何となく思うじゃない。そこが大事なんだよね。結局、こういう環境の中で、それぞれみんなサボろうと思えばいくらだってサボれる。でも、そんなことをやってもしようがないとまず思うような人たちがたぶん来るんだと思う。そうしたら自分にとって何かいいことをやろうとか、やってみようとか、工夫してみようとか、そう思ってたことは、必ずや将来、何かの形で役に立つと思っている。人に言われたことを完璧にやっただけだったら何も残らないと思う。主語を「I」に

して動くことが大事だと思う。  
——先生の研究室は、機械科ですが女性がたくさん活躍していますよね。  
**梅津** 僕の研究室にはたしかに結構女性が入っています。前に、研究室にきた子に「なぜうちに来たの。将来どうするの」と聞いたら「先生、笑いませんか、私、就職したくなくてお嫁さんになりたいんです」と言ったんだよね。えーっ、と思って「じゃあ、どうしてうちに？ 結構大変なの知っているだろう？」と言ったら「先生が優しくそうに見えたから」と言われてさ、がくつときたな（笑）。

——先生にとっては意外な志望

理由だったのではないでしょう（笑）。

**梅津** 僕は結婚だとか恋愛だとかの相談つてもすごく苦手なわけ。何て言うか、責任取れないじゃない。責任が取れるようなことだったら、いろいろとアドバイスをするけど、人間というのは多様性の生き物だから、その中で1つの事例がうまくいったから、おまえ、こうやったらほうがいいよとはとても言えないんだよ。金融工学以上に難しい。だから、そういうことに對して応援はするけれど、こうやったらほうがいいんじゃないか、とアドバイスなんか絶対できない。でも僕ね、途中からちゃんと応援していましたよ。彼女には、うちで技術や何かし

らの哲学を学んでやっていけば、将来、何か役に立つことがきつとあるから、梅津研での研究を真剣にやっ

たらいいと言った。そうしたら、いい卒論を書いて、会社に入ってバリバリ仕事をして、そのうち社内恋愛でいい人を見つけて結婚して、会社を辞めて専業主婦として子育てをやっているんだよね。だから結局夢を叶えているわけでき。僕自身も哲学に沿って生きているから、夢は一つずつ叶ってゆくわけですよ。

——先生の哲学とは？

**梅津** 僕が伝えたいことは1人1人みんな違うか

初めには言われたことがずっと続くわけではない。人間は生きているのだから。

ら、共通の哲学を教えるから、みんな言うことを聞きなさい、とはいえないよ。だって、人によってみんな価値観が違うでしょ。だから、「私は良い研究をした」という子に対して、高学歴になるから、後で後悔する前に人生設計を何とかしておいたほうが良いと思えば、そういうアドバイスをする。でも、初めに言われたことがずっと続くわけではない。人間は生きているのだから。だから、変えていいんだし、初志貫徹なんかしなくていいと思う。

この前、僕の弟子の坂口君が卒業式の謝恩会の際に良いことを言ったんだ  
よ。それはね、「ダーウィンの進化論の話の中で、強い者が生き残るのではない。フレキシビリティのある者が生き残る」ということなんだ。彼は大企業を辞めて大学の研究の世界に戻ってきた。僕の知り合いでも、会社の中で生き延びるやつもあれば、会社を辞めて生き延びるやつも現にいるんだよね。そして、それぞれを僕は応援する。だってフレキシビリティをそこで駆使すれば、それぞれの人生があるわけだから。フレキシビリティのある人は、最終的にい



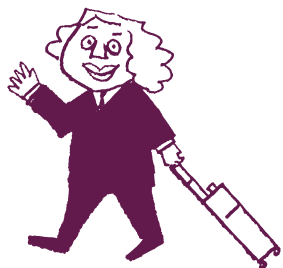
大学院生に研究について助言する梅津先生 [Keyence 研究・開発現場レポートより]

## 『工夫1つで趣味は仕事に役立つ』

電車好き  
ならではの  
時間節約術

僕の場合、講演依頼があり、そこに行く切符を購入する時、新幹線の何号車を予約するかというのは、講演場所が決まった段階で大体決まるんですよ。なぜかという、新幹線は何号車に乗って、新大阪の駅はここで降りて、ここまで行くと一番早く大阪方面の電車に乗り換えられて、最終的に大阪環状線の一番後ろに乗れば、大阪城公園で降りたときにこのホテルに一番早く行けるとか、緻密に計算する。だから僕の場合は東京駅の段階でこの席に座るかが決まっているわけ。そうやってやると、たぶん普通の人よりも、20~30分早く着いているんだよね。鉄道が得意だということは、そういうところでも役に立つ。なにせ僕は早稲田大学鉄道研究会の会長だからね。

1回びっくりしたのは、同僚の女子医大教授の清水達也さんと大阪で一緒に夕方講演だったとき。我々はその日は当然、帰れないわけだよ。「どうするんだ」と聞いたら「僕はホテルを取りました」と言うから、「へへ、わしは寝台急行『銀河』で帰るぞ」と言ったの。すると彼の目付きが変わってね。彼はやっぱり予定を変えて僕と同じ寝台列車に乗ることになった。それでさ、気が付いてみたら、たまたま2人が寝台の上下だった。2人とも全く眠れなくて……、もったいなくて眠れないんだよ。ずっと話してさ。彼は奥さんに何でこんなに夜行でと怪しまれたらしいんだけど、僕と一緒にだと聞いて安心したと言っていた(笑)。

心身の平和と  
夫婦の時間は  
月曜朝のテニスから

僕はね、月曜日の朝は大学に来ていないんですよ。月曜日の朝は9時過ぎから荻窪のテニスクールに通っているの。インドアテニスだから雨が降ってもテニスに行けるんだよ。そこでもう20年続いているんだよね。家内と行っているんだけど、やっぱり普段これだけ忙しくしているから、ある特定の時間を妻と共有しておかないといけないかなと思って。朝、テニスをやって、早いお昼をどこかで一緒に食べて、1週間の始まるの時間を共有するということをやっているんだよ。

自分1人で生きていたら、僕はたぶんこんな仕事はできていないと思うからね。体の管理とか、心のケアもね。まずは体が健康でないと心が平和にならないんですよ。

僕は1年半前に、女子医大の病院の中で心臓が止まったんだよ。狭心症になったと言って山崎健二先生を呼んだら、彼の外来中だったにもかかわらず駆けつけてくれた。また、周辺の先生もたくさん来てくれた。緊急の冠動脈の造形検査の後、一晚入院してただけで、僕が入院したという噂がばーっと広がって、夜11時でも面会の人々が来ていた。大丈夫だということが分かったと帰らないんだよ。それでずっと話していた。結局、大丈夫だったけれど。よく、研究している病気でみんな死ぬめと言うけれど、きちんと検査をしてもらって、データはちゃんとしっかりと見て、それで大丈夫だったかもしれないね。

まあ、そういうことで、テニスは気分転換になっているね。それに、完璧に細胞を活性化させているね。へとへとになって疲れるのがいい。どんなことだってそうだと思うよ、ずるずるやるよりは。実験だってそうじゃない、どこかでメリハリをつけないと。人の体はやっぱりそうになっていると思う。あと、僕はコンスタントに地下鉄早稲田の駅からTWInsまで行き帰り歩いているんですよ。でも今朝は別。電車に乗ろうと吉祥寺駅の階段を駆け上がったら、少し心臓に違和感があり、スプレー状のニトログリセリン使った。だから今朝はバスに乗ってきたけれど(笑)。



梅津研究室20周年記念集合写真

いろんなことができるんだね。結論はそこですね。

——最後に先生のこれからの夢を教えてください。

梅津 夢はずっと持ち続けてはいるけれどね。僕の夢が他の人に負担になってはいけないと思うときがあるよ。例えばこのTWInsの後を頼むよとか。私も岡野さんもうずらはリタイアするのだけれど、その後、どうなるかというのは、僕としてはものすごく不安だよ。でも周りは僕よりもっと不安だということが分かった。みんなTWInsを何とかしたい、夢を持って何とかしたい。でもその夢は、本当に一番先に僕たちが思っているイメージのまま動いているの

だらうかというところで、ちょっと違うなと思うこともときどきあるんだよね。TWInsを何とかしようとする機会を増やして、自由な意見交換と夢を語ることを続けるのが大事なのだと思う。将来は世界的な拠点となるTWInsサテライトなどができてるかもしれない。



梅津光生(うめづ・みつお)

1979年早稲田大学大学院博士課程単位取得後、国立循環器病センター初代研究員、1985年には同センター室長。1988年よりオーストラリアのシドニー・セントビンセント病院客員工学部長を務める。その後、早稲田大学に戻り1990年に助教授、1992年教授就任。2001年には早稲田大学大学院生命理工学専攻初代主任を務め、2008年より早稲田大学先端生命医科学センター(TWIns)センター長、2010年より東京女子医科大学—早稲田大学共同大学院共同先端生命医科学専攻長を務める。工学博士(早稲田大学)、医学博士(東京女子医科大学)。



YASUHIKO TABATA

勉強が苦手な少年時代  
英語をきっかけて：

——まず小さい頃からの話を  
おうかがいしたいと思います。田  
畑先生はどのような子供時代や  
大学生活を過ごされたのですか。

田畑泰彦（以下、田畑）大阪の  
京橋という、商売人の町のと真  
ん中で生まれ育ちました。もの  
すごくいかがわしい、柄が悪い  
ところで、昔は日本刀を振り回  
したりする者もいたりして、す  
ごくアブナイところでした。

父は家具屋の二代目、後にイ  
ンテリア関係の仕事に広げて  
7、8軒のチェーン店を持った  
り、不動産、貸しビルや貿易も  
やっていた実業家です。私はそ  
の一人息子、姉が一人いますが、

跡取りですね。しかし、勉強が  
できなかった。小学校6年間で、  
5段階評価で5をもらったのは  
2回だけです。

——やはり理科ですか。

田畑 いえ、家庭科の料理と体  
育の水泳（笑）。算数、理科は、  
1とか2。なにしろ分数ができ  
なかった。分数ができなかった  
小学生でも、こうして大学の教  
授になれるのだ、ということ  
を強調しておきたい（笑）。「おれは  
頭が悪いんだ」とずっと思って  
いました。だから落ちこぼれや  
劣等感を持っている人の気持ち、  
わかります。小さい時からでき  
子って、私から言わせれば、エリー  
トコースを歩いてきており、い  
ろいろなコースを知らない。だ

研究者たちの素顔

Vol.05

田畑泰彦

Interview  
村岡 秋元・松坂（東京理科大学）

## 『目標がない』 それが私の目標

研究分野のみならず、

テレビなどのメディアにも出演され、

多方面で活躍されている京都大学教授、田畑泰彦先生。

「自分の技術を伸ばすため何でもやる」

その言葉通り、境界領域とも言われる

再生医療の研究を進めるため、

工学、医学、薬学と3つ博士号を取得した

先生の原点は勉強がまったくできなかった

少年時代にあった——

から打たれ弱いですね。

このままだと商売を継ぐ  
こともままならないと家庭  
教師も付けてくれて、私立  
中学校を受験したが、勉強  
しないから落ちるのは当た  
り前で、中学校は地元の公  
立に進みました。以前、自  
分の子供にばかにされまし  
た、「パパ、そんな中学校に  
落ちたの？」（笑）。「将来、  
50歳になって、どっちが成  
功しているというのではな  
くて、自分が幸せに生活で  
きるか、それで競争しよう  
や」と言い返しましたが。

——その頃の夢は何だった  
のでしょうか。

田畑 特にありませんでし

通信簿で算数・理科は1とか2でも、  
こうして大学の教授になれる。

たね。毎日がとにかく楽し  
ければいい、天真爛漫。学  
校の成績は駄目、忘れ物ば  
かりしている。親はずいぶ  
んと心配したでしょうね。  
とりえといえば、愛想がい  
いところでしょう。商売人  
の息子で、商人の町で育っ  
たからでしょうか。ところが、  
中学に入って、「自分はやれ  
ばできるんじゃないか」と  
思うようになったですね。

——そのきっかけは？

田畑 英語です。その頃は  
中学へ入ってから英語を初  
めて習う。最近はずっと早  
くから習ったりしますよ  
ね。それを奨励されていま  
すが、私は反対。

話は逸れるけど、日本語が話  
せるから、日本語で考えるから、  
日本人なんです。ところが、今  
の日本語はものすごく乱れてい  
るでしょう。日本語でまともに  
話せない、考えられない。それ  
が英語ならできるかという、  
英語もろくすっぽできない。  
そんな人間、どこの国の人かわ  
からない。日本語で考えられて、  
正しい日本語を話すというの  
が、いちばん大切なのです。こ  
れが日本人ということ。そ  
のために中学くらいまでは、  
まず日本語をしっかり勉強する  
ことです。英語なんか要らない。  
私はそういう方針で、自分の子  
供には、小学生までは英語を押  
しつけていません。

話を戻しますが、小学校の成





績が優秀な子も、できの悪い自分も、英語は横一線のスタート。そこに父が目をつけた。「こいつは劣等感ばかり持っているが、英語に関しては優越感も劣等感もない。英語の力がついたら、きっと他の勉強にも自信がつくだろう」と思ったのでしょ

うね、中学生になったら英語の家庭教師を付けてくれました。すると、中学2年頃から勉強の成果があらわれてきた。「あれっ？」って思うくらい他の子よりもできるようになった。「おれもやったらできるな」という体験ですよね。それからです、バリーと成績が上がったのは。だから、私は中2から、こんどは優越感を持つようになった。父が、「少しずつでも成績が

上がってきている。やればできることは、わかっただろう」と言う。やっぱり勉強したらいいのだな、おれもそんなに頭悪くないのだというのがわかったから、素直ですね。「うん、親父わかった」。すると父が、「もう一回、次の目標を立てろ。高校は、大手前高校へ行くように頑張れ」と。大手前高校についてもすごい進学校、京都大学に毎年100人は入るようなめっちゃくちゃ優秀な学校でした。しかし、とりあえず上を狙いたい、親父に言われることを見返し親父を追い越したいという気持ちで目指して無事入れました。

### 人間の体に興味を持ち研究者の道を志す

——その頃から、将来何をするかを具体的に考えられたのでしょうか？

田畑 父を超えること。といっても仕事やお金ではないかもしれませんから、違うことをするとは漠然と思っていました。高校生の時に、ようやく夢ができました。それがサイボーグをつくることです。

——その夢を持つきっかけは？

田畑 人間のからだに興味があったからです。祖父はがんで亡くなっていますが、父は健康で丈夫。からだ、病気って不思議だな、と。

——からだや病気に興味をもつと、ふつうは医師、医学部を目指すのでは？



中学3年の修学旅行で行った鎌倉にて。この頃、難関校を目指して猛勉強をしていた。(田畑先生は上段の左から2人目)

中には硬い骨がある。骨ってセラミックスのようなものだと思うが、手の柔らかいところは何だろうと。有機物という言葉も知らなかったから、ゴムか人工皮革のようなものかと思ったのです。ゴムとか人工皮革とは何か、辞典で調べてみると、高分子と書いてある。「あつ、高分子なんだ。高分子化学を専攻すれば体をつくれるのだ」と思った。それでサイボーグ。

——お父様は、家業を継いでほしかったのではないのでしょうか？

田畑 父が「おまえは何がしたいんだ」と言うので、サイボーグとは言わなくて、人工血管をつくりたいと言ったのです。漫画にあるような、チューブみた

いな人工血管のイメージ。そうしたら親父は、「おまえ血迷ったか。人工血管って何だ」という。「プラスチックのチューブで体を置き換えるんだ」「それはちょっとおもしろそうだな」と。「それならば時間を切ろう。30歳までは、ブー太郎でも面倒をみてやる」と。いい家庭でしょう、30まで何をやってもいいですよ(笑)。そうとなったら、父が取引のある銀行を通じて情報を集めてくれました。条件は、国立大学で、理系なら理学部でなくて工学部——これは商売人の感覚でしょうか、サイエンスをテクノロジー(サイエンスで得られた成果を研究を進めて商品化するのがテクノロジー。サイエンスは理学部で、

テクノロジーは工学部)にするのが工学だということで、医療材料やマテリアルサイエンスをやっているところ。それであがった情報が、京都大学で高分子化学だったのです。そこで、迷うことなく京都大学工学部高分子化学科へ入学しました。

これは後からの知識ですが、京都大学の高分子化学科は日本の高分子化学の草分けで、ピニロン<sup>\*</sup>を作った桜田一郎先生(故人)が名誉教授。桜田先生が教授のときの助教が中島章夫先生(故人)、その時、筏義人先生(現・京都大学名誉教授)はまだ4回生でした。日本の医工

学、バイオマテリアルをつくったのは京都大学ですよ。工学部にも医学部のような医局制・講座制があって、就職とか研究室に残るとかは、すべて先生の差配で決まった。大名の配置みたいに(笑)。工学部の応用化学というのは、医学と同じで基礎と応用・臨床があって、より実学的なところがある。再生医学研究所も、もとは医用高分子研究センター、生体医療工学研究センターというセンターです。京大医学部の整形外科と口腔外科、呼吸器外科、それと工学部の高分子化学が集まって、センターとしてまず認められた

【ピニロン】世界ではナイロンにつき2番目、日本では初めて作られた合成繊維。吸湿性がありロープなどに利用されている。ピニロンはポリビニルアルコールをホルムアルデヒドで処理することで合成できる。

のです。医学と理学との組み合わせはあるが、医学と工学が共同研究のセンターまたは研究所をつくるというのは、世界も例がなかったのではないだろうか。

——大学入試には苦勞されましたか？

**田畑** 当時は共通一次試験が導入される前、国立一校・二校の時代です。京都大学の場合、試験は3日間12時間、900点満点でした。数学は5間で3時間、気力と体力の勝負でした。入学試験時に最大瞬間風速を出す、そういう能力があったのと、センター試験がなくて助かった

らしい器量が小さかったのですね。ところが、たまたま医学部の友人と書店の数学書のコーナーで出会って、「おお、久しぶりだな。なんでこんなところにいるんだ」と聞いたら、「数学の問題でも解かなければ頭が腐る」と言う（笑）。医学部というところは、覚えることばかりなのだという。ものを考えていくということは少ない、そういう思考ではないのだそうです。また、友人に組織学の本を見せてもらった時「医学よりも工学、理学の先生が執筆者に多いのを知りました。やはり間違っはいいのかな。工学から医学に行ける、工学知識が医学にも必要だ。ポリバケツの研究もサイボーグに到達するのだと思

## 今の学生は、「これが得意で他人には負けない」というのがあるのかな。

（笑）。得点のとれない科目は得意な科目で穴うめをして、トータルの得点で勝負する。国語ができなくても英語・数学では負けないぞと。優越感と劣等感を自分の中に併せ持っていたのが、ここでもよかった。でも当時の学生はみんなそうだったように思う。今の学生は何でもできるのだけれど、「これが得意で他人には負けない」というのがあるのかな。劣等感をもったことがあるのかな。この気持ちが必要ならば、落ち込んだ時立ち上げられないのでは。

——京都大学に入ってみていかがでしたか。

直すことの大きなきっかけになった。でも、あの頃、工学部の高分子化学の中で医用材料バイオマテリアルといったら、まったく市民権はなかったですね。

——その頃の思い出深いエピソードとありますか？

**田畑** 修士課程1年の時に話は飛びますが、James Anderson 先生（現ケースウエスタンリザーブ大学教授）との出会いです。出会いといっても、こちらは学生で押しかけ同然でした。Anderson 先生は、現在アメリカの人工臓器学会の会長ですが、もともと工学博士で、医学博士との

**田畑** これはだまされた（笑）、と。そもそも筏先生の研究に惹かれたといっても、具体的な専門もよくわからなかったし、筏先生は助教授で1回生、2回生にはほとんどかわらない。高分子化学といっても、ポリバケツなんかのことばかり（笑）。人工血管はどうなったんだ、とこれは医学部に入り直したほうがよいのかしら、とずいぶん悩みましたが、工学部に決めた時点で自分自身で鎖国状態をつくっていました。医学、生物はもう封印してしまわないといけない、そっちに動いてしまわないよう、自分を封印して頑張らないといけないという感じ。だから、生物の本とか医学の本は一切読みませんでした。そのく

## 授業では一番前の席に座って、顔を覚えてもらえ。一生懸命聴け。印象づけろ。

ダブルデングリーを持っていた。日本でそんな人はない時代です。

バイオマテリアルの学会で京都大学に来られた時に、「私の人生について相談したい」と、紙に書いて、直訴ですね（笑）。「何だ、おまえ」みたいな感じでしたが、まあホテルで会ってくれました。「私は実は医

生を募って京都大学に入ったのですが、筏先生はまだ助教授なので講座を構えていないから、これでは自分の夢がかなえられません。だから、私はアメリカへ留学したい。京都大学をやめるから、アメリカへ連れて

行ってください」と。そうしたら、Anderson 先生は、「筏先生というのは今、助教授だけれど、これから日本でバイオマテリアルの中心になっていく。だから、おまえはそこへ行けば、おまえの道は救われる」と言われたのです。「日本では教授にしかつけない」と英語で言ったのですが、通じたかどうか。

その当時、英語がはつきりと聞き取れなかった私ですが、Anderson 先生は、「そんなの簡単だ。何言ってるんだ。その先生について行ってやったらいいじゃないか」と言われたと思います。アメリカと日本の大学は違うから「それはできない」と言ったのです。そうしたら、「筏先生の授業をとっているか？」

大学時代の友人たちと（田畑先生は左から2人目）。優越感と劣等感の両者をもつユニークな友達。現在、いろいろな分野で活躍している。これもよいネットワーク。



と聞かれた。「授業はとつています」「それなら、授業では一番前の席に座って、顔を覚えてもらえ。とにかく一生懸命聴け。印象づける。それで、その先生が講座を構えたらそこに入れ」というふうにサゼスチョンされたのですね。

これはひとつのエピソードで、転機となった出来事はいろいろあります。こんなふうには私はものすごく悩みが多い。しょっちゅう悩んでいる。自分のことについて、学生のことについて、将来について。周りからはまっすぐ走ってきたように思われているかもしれませんが、いつもこんなふう悩んでいるとは周囲から見られていないでしょうね。実は私はよく悩

み、いろいろなことを気にする性格です。だから、目的がはっきりしないとい走れないのです。常に考え続けることで、チャンスを見逃さない

——先生の研究室での指導は、どのようになさっていますか。

**田畑** 博士課程に行つて大学の先生になりたいのか、博士号を取つて研究者として企業へ行きたいのか、学生によって要求のレベルは違いますが、研究指導はすごくきついと思います。材料学だけでも、モノをつくつて確かめて終わりじゃない。デザインして、モノをつくつて、生物学、医学、医療への応用も研究しなければいけないから、人の2倍、3倍働くことが必要。

それが再生医学分野です。「もう一回、調べ直してこい」「こんなこともわからないのか。それだつたらやめてしまえ。研究者やめろ」と怒ることはしょっちゅう。怒るけれども、フォローをこころがけている。ただし、

「ああいうことを言つて悪かつたな」とは言わない。上下関係ですから、そういうことを言つたらややこしくなるので。「最近どうだ、元気にやっているか」「これわからないから教えてくれ」「とか。私はいつも学生に、「教えてくれ、教えてくれ」と聞きます。「学生に教えてくれて、この先生アホじゃないか」と思われるとは、全然思っていないし、思われても別に平気です。

研究指導は、研究成果の将来

の応用展開など具体的な話をします。例えば、工学部の学生に対して医学的、薬学的なバックグラウンドから出口に至るまで時間をかけて話をします。どのような分野があつて、今はここまで来ていて、私たちはここまで

来ている。だから、これをやる、この分野は取れるだろう。だからこれをやるか。あるいは、ここから行つてここへ行くか。どっちへ行きたいか。研究テーマは学生と一緒に決めるようにしています。しかしながら、最初は右も左もわかりませんので研究内容はトップダウンです。わからないと言つたらわかるまで、押さえつけじゃないけど、一度やつてみようと言つて。1か月後、2か月後に、「お

まえ自分のテーマを見つけたか」。私は何回も言います。「どう？」「どう？」「どう？」と言つて。学生がおもしろいことを見つけたら、「おお、それやろつ、それやろつ」。

——自分のやりたいことがわかつてくるまで待つということでしょうか。

**田畑** 大学の場合にそれがいちばん大切。大学は研究だけではなく、教育機関でもあるからです。通常、うちの学生は最低3つぐらいテーマをやっています。一つは、本当に教科書に載るような新しいアイデアの証明。もう一つはその応用研究。最後は、共同研究者の材料作りのアシスト。私は頭の中では、

50人の学生がやっていることは

全部つながっています。ディスカッションを毎週行っています。「肝臓の」というようなテーマごとのグループではなくて、水溶液、粒子、フィルムとかテクノロジーで分けています。毎週毎週、学生とディスカッションをして、そのときに、「ああ、粒子うまいこといつてない。そうしたら水溶液で行う。水溶液やっている誰か呼んでこい」「こいつに1週間教えてやつてくれ」という感じでね。

研究室セミナーも、週一回ペースで行います。個別のディスカッションは別の日にあります。セミナーの時にも、簡単に研究内容を話してもらい、質問の受け答えをします。その時に

2つのことを学生に学んでほしいと思っています。一つ目は、学生が一人ひとり

立つて、私の質問に対する受け答えの練習です。もう一つは、学生が何をやってるか、みんなに知らしめることです。みんなの問題、どこがおかしいのか、どこをやった方がいいのか、それをみんなにわかつてほしいのが、セミナーの意味ですね。「これ、先生、困っているんですよ」「ああ、そうだな。同じ困っているやつ手を挙げる」みたいな。そうしたら、みんな手を挙げますよ。「これだけ皆同じことで困っているんだ。あとで相談しておけ」。そ

私は常に問題意識を持っているから、「これは使えるのではないか」ばかり考えている。

それがセミナーです。

セミナーには外の人を演者として呼んでいます。毎週、大学の先生、弁護士、弁理士、ブローカーとか。いちばん学生にうけた演者は、祇園のママさん（笑）。テーマは、なぜ京都に舞妓さんの文化が300年続いているか。舞妓さん・芸妓さん、あの人たちは若くして来て、ちゃんと修業をして、結婚したらやめなければいけないですね。江戸時代からずっと続いています。なんでそれが続いているかそういう話をしてもらう。そういうふうにして、学生にいろいろなことを聞かせて勉強させるチャンス





YASUHIRO TABATA



田畑研究室のラボメンバー。医学、歯学、工学、薬学、などの異なる分野の人と企業人との混合チームからアイデアが出る。

を与える。そうすると優秀なやつ、目利きができるやつが増えます。これを期待していませんが。

——研究テーマの設定、アイデア探しはどのようにされるのでしょうか。

田畑 研究テーマの設定に対し

ては、ある程度の範囲はあります。でも、自分の技術が伸びるのであれば、私は何でもやってみます。ただ、それを始める時には、まず専門家と話す。あるいはユーザーの意見を聞いてみる。それをしなければ、どんなかんたんな目的のぼけた研究になってしまふ。

——ありふれたものを組み合わせること、誰もやっていなかったことがやれるということでしょうか。

田畑 難しいことを考えすぎないこと。自分しかできない技術を出すというのが、工学部の『偉い』なんです。自分にしかない合成の方法であったりね。基本的なテクノロジーは6

たら、アイデアが2、3個はうかびます。

本当かどうか知りませんが、人間というのは人生に5回チャンスがあるのだそうです。5回チャンスは、必ずどんな人でも、目の前を通り過ぎていく。それがつかめるかどうかというのは、どれだけ考えているかです。それをうまくつかみ、物事がうまく進んでいる人を見て、皆さんは「あの人はラッキー」「棚ぼた」だと言いますが、人生には「棚ぼた」などはないです。その人がそればかり考えているから、チャンスが目の前を通ったのがわかったのです。アイデアってそうでしょう。普通、同じように話を聞いていても、それでピンと来る人はピン

つくらいもっています。それは、※ハイドロゲルの徐放（P63参照）とか、※トランスフェクションとか、細胞の培養とか、固定化技術とか、そういうのは皆さんが理解できることですね。それをどうやって使うか、どうやって組み合わせるかだけの話なのです。私は、それは人よりもものすごく考えていると思います。

たとえば、メガネがくもらないテクノロジーがある、服のパチパチ防止のテクノロジーがある、人工血管で血管が血栓で詰まらないテクノロジーがある。

「ハイドロゲル」水を大量に含むゲル。「トランスフェクション」遺伝子を細胞に組み込ませ、タンパク質を産生させること。

と。その結果、お金がバツとたまった。ところが、器が小さかったらお金はあふれてしまいます。だから損していく。人脈でも、最初から人脈の器をつくっておけば、器が大きかったら、将来人脈ができて、絶対人脈は守れるのです。人脈が消えていくというのは、つくった器が小さかったのです。

——小さい器しかつくってこなかった人は、どうしたらいいのでしょうか。

田畑 今から器を足すことです。器が小さければ、器の大きい人を友達にすることです。自分のがあふれそうだったら、友達の器に入れておいて、必要な時に、少しずつ自分の答えに移

これは全部違う学問分野のように見えるけれども、用いているテクノロジーは同じです。何かわかりますか？

——コーディングでしょうか。

田畑 そう。だから、何を何のためにコーディングして、どういう実験をして、どこの企業と組んでどうやって売り出すかだけなのです。それがわかっています。いくらでも広がります。

おもしろいように広がっています。それを常に考えろと学生に言っています。私は常に問題意識を持っている。だから、話をしているでも、聞いていても、「これ使えるのではないか」ばかり考えている。それがものすごく楽しいですね。1回学会へ行っ

していけばいいのです。あるいは、大きな器の人を使ってというか、友達の大きな器の中に自分の器をばんと入れたらいい。

——器を大きくつくるにはどうすればよいでしょうか。

田畑 自分の勉強にもならないけれども、いろいろなことを見てきた。先輩のお手伝いをしてきた。論文にもないけれどもお手伝いをしてきた。外人が来たから、自分が手を挙げて、外人と一緒にどこかに行ったりした。学生が来ても、関係ないのに、しっかりと、ずっと時間を割いて話をする。そうしたこと、積み重ねて器が大きくなるのだと、私は信じて生きています。自分に対してためになるよ

# 人脈作りと研究は一日にして成らず

田畑泰彦

## 手紙を書く

僕は、教授になった時にビジネス本とか帝王学とか、ああいうのを手当たり次第読みました。リーダーとはどういうふうにかえるのか。でも50冊読んでみてください、その手の本は全部同じだということがわかります。そうしたら、もう、頼るものがないんです。そこで出合ったのが時代劇なんです。やっぱり歴史小説、歴史物がすごくおもしろい。

例えば、徳川家康と豊臣秀吉がいるでしょう。あの時代に、全国の人に以心伝心しなければいけない。そのときにどうやってやってるかというと、手紙しかありません。そうすると、いくら飛脚で走らせても、2、3日かかります。ということは彼らはそのぶん先を読んで手紙を書いているんですね、めちゃくちゃ賢いんです。そして毎日50通も60通も手紙を書いている。戦争のとき、ピンチになってから援軍をお願いしてもしかたないから、先をものすごく読むんです。そういう時代の人なんです。彼らが総理大臣になったら、一発で日本が変わってしまうと思うんです。

今は携帯があったら、すぐに何でもわかっていような気がなくなつてね。検索したら何でもわかった気になる。それは絶対駄目。いまは、そんな時代だからこそ、直接行ってあいさつしたり、すごく印象に残ります。今の時代だから、ちゃんと人間性を出したら、ものすごく高く評価されます。狙い目ですよ、今こそ。ちなみに僕は、年賀状を全部手書きでちょこちょこ書いています。いつも800枚ぐらい書きますが、年賀状ってすごいです。一枚出した、それで1年つながるんです。たった50円、安いじゃない。そして年賀状というのは1日に着かないと意味がない。どんな忙しい人でも、1月1日は必ず年賀状を見ている。2日は見ない。2日に着いた年賀状は年賀状ではない。わかりますか？ 携帯で年賀のあいさつ？ そんなの、「おまえ人間か」みたいな（笑）。

僕が学生によく言うのは、「真剣にやれ」ということ。例えば自分があるアイデアを持っていて、こんな実験がしたいと先生に提案しますよね。ところが、「何言ってるんだ、そんなのいかん」と言われてすぐ引き下がる。すぐあきらめられることは、そんなにやりたくないんです。好きな人ができて、お父さんに反対されたとして、引き下がりますか？ 何回も行きますよね。じゃあなんで実験はそうしないんだ、ということ。それは、真剣味が足りないという事です。何度も言ってくるなら上の人は、「おまえらまだ言ってるのか。そんなにやりたいならやれ」となります。誰かに反対されて諦めるのは甘ちゃんなんです。

学生時代の僕は、先生に秘密の研究をいっぱいやっていました。今の学生さんというのは、言われたことをやりますよね。秘密の研究はあまりしない、でも本当は秘密の研究のほうがおもしろいんです。秘密の研究をやつて、いい結果が出たら、それで先生を喜ばせてやるという感じですよ。

おかげで、実は失敗談もいろいろあります。中でもあれは、前代未聞の事件でした。

工学部の3年生のときに、化学系の研究室でスチレンか何かの重合をしていて爆発させて、棒温度計をロケットみたいに飛ばしたんです。そんなことをしたのは、後にも先にも僕だけですよ。そのとき、「おまえ化学やめたらいかんぞ」と言われたので、「絶対やめませんよ」と返したんだけど、「でも、おまえ、合成だけは行くなよ」と言われてしまった。結局、合成に行きましたけど（笑）。ほかにも、大抵のことはやつてます。だから、学生がなんかやつたって平気です。

## 諦めたらそこで…



いことを言ってくれる人を何人知っているかどうかでしょう？ 同じ時間しゃべっても、しょうもないやつとしゃべるのだったら、家で寝ているほうがよっぽどいいですよ。

最後に、先生の将来の夢についておうかがいします。

田畑 新しい研究を進め、その成果を基礎にして、世の中の人を幸せにしたいですね。ビジネス化もその1つの大きな手段です。

たとえば、もし自由になるお金ができたとしたら、それで財団をつくりたいです。私の財団を立てて、若い人の研究のサポートをする。医工連携科目を教育できるような学部ができるという。biomedical

engineering（生体医工学）というのは、アメリカではあるけど、日本ではできないですね。そこで、私は自分の研究室の中でこの領域の研究・教育をおこなっています。研究室の中は教育機関みたいなものです。セミナーとかジャーナルクラブで、工学部の人には医学の勉強をさせて、医学部の人には工学の勉強をさせる、薬学部の人には工学の勉強をさせる。他にも、たとえば再生治療病院とか、生体吸収性のハイドロゲルを使って再生治療するような病院をつくりたいじゃないですか。この治療であれば、企業が本気になる。ハイドロゲルはできるし、すぐに患者に届けることができます。この方法だったら再生



田畑泰彦（たばた・やすひこ）

京都大学再生医科学研究所 教授  
1981年、京都大学工学部高分子化学科卒業。同大学院に進学し1988年に工学の博士号を取得。その後、京都大学医用高分子研究センター助手、同大学生体医工学研究センター助教授を経て現職。教授就任後、2002年に医学、さらに翌年薬学の博士号を取得。

治療は本当に現実になるじゃないですか。

「目標がないのが私の目標」と言っていますが、いろいろなことを並行して進めている。また、やりたいから、目標がどんな、どんな変わっていきま

す。サイボーグでも、化粧品でも、ある目標があつて、その次にまた別の目標があつて、また

その次は…。そういうことで、目標がないのではない、具体的な目標というのは、段階に応じて作られていき、いっぱいあります。目標というのはそういうものだと考えています。

## 青春時代の思い出 仲間たちとの絆

——まず医師としての川原先生が誕生するまでについてお伺いしたいと思います。ご出身は北九州と伺っていますか？

川原尚行（以下、川原）はい。九州とアフリカしか知りません。広島に1年、ロンドンに1年住んだばかりは。

——小さい頃はどんなお子さんだったのでしょうか？

川原 正義感は強いような。自分ではけんかするほうではなく、けんかの仲裁をするような感じの子でもでしたでしょうか。

——医師になろうと思ったとき

かけはありますか？

川原 特別な事情やエピソードはまったくありません。近所の寺の和尚さんがよく家に来ていて、「おまえ、社会に役立つような仕事せえよ」と説教されたくらいでしょうか。

——では、やはり大学への進学  
のときですか？

川原 いえ、高校（福岡県立小倉高校）時代はラグビーしかしてなくて、勉強はまったくしていません。高校ラグビーは全国大会（花園）が冬にあるので、それを目指して3年生の冬までやっていたんです。それで大会が終わって気がついてみたら何もない。とりあえずの目標として大学への勉強をし

研究者たちの素顔

Vol.06

川原尚行

Interviewer:

村岡・宮田 近藤 秋元

## 損得よりも 大事なこと

自身を評して

「あまり後先を考えずに突き進むタイプ」

そう語るのは、赴任先のスーダンで深刻な医療問題に直面し、  
外務省医務官という安定した地位と収入を投げ打ち、  
医療活動に身を投じた川原尚行先生。

理事長を務められる

NPO法人ロシナンテスの設立のきっかけ、

協力を惜しまない仲間や後輩とのエピソードを交えながら

医師、川原尚行の素顔に迫ります。

ないといけないな、と思った。

でも、医学部どころかこの大学にも受かるような成績ではなかった。今からでも勉強するか、どうせ勉強するなら医学部を受けるか、と思って、2年かかりましたが医学部に入りました。まあ、その程度で動機と言えるかどうか。

——高校時代はラグビーで活躍され、そのときの仲間とのつながりが深く今も交流があり、ロシナンテスの立ち上げなど、川原先生のお力になっているとお聞きしています。その頃の印象的なエピソードがあればお聞きたいのですが？

川原 そうですね。私たちの代のチームはけっこう強かったん

です。上の代の先輩は春

で部活をやめて、勉強して大学受験に取り組むのが普通でしたが、私がキャプテンで、「花園に行こう」と思った。それで副キャプテンと2人で冬までやりたいと言った。でも他の部員は、やはり練習もつらいし、勉強もしたいというので、春の大会でやめると言っていました。

ところが、その春の大会前に、私がけがをしてしまったんです。手術して、入院。大会に出られなかった。そうしたら、みんなが病院まで来てくれて「おまえと一緒にラグビーしたい」と言ってくれた。「じゃ

私は下級生に罰則を与えたときは、  
自分も一緒に先頭を切って走っていました。

あ、おまえら、きつい練習にも耐えるな」、「オー」と言って、それで3年生も残って全国大会を目指したんです。

——ドラマみたいで、感動的ですね。それで全国大会に出場できたのですか？

川原 県大会も勝ち進んで、間違いなく花園に行けると思っていたら、スクラムハーフの2年生が出場停止。代わりに1年生を入れたのですが、スクラムハーフというのはフォワードとバックスをつなぐ要のポジションで、当然相手はそこをつぶしかかってくる。それで本来勝てるチームに



負けてしまった。そいつはわんわん泣いていました。そいつは今、ロシナンテスの事務局長をしていますよ。

——苦い経験も、それを共有したということが財産になっているのですね？

川原 強いつながりができたことは感じますね。

——川原先生がキャプテンとして、チームを率いるのに気をつけていたこと、意識していたことはありますか？

川原 例えば、今と違ってボールが本革で、下級生にはボール磨きという仕事があった。ボール磨きは朝練や始業前、昼休みにやるのですが、その磨き方が

悪いと罰則があったのです。あと、練習に遅刻してきたら、これも罰則。罰則はキックダッシュを20本とかです。普通、罰則って先輩たちは与えるだけ、下級生を走らせるだけで、自分はいらないものでしょう。ですが、私は下級生に罰則を与えたときは、自分も一緒に先頭を切って走っていました。だから後輩たちは文句も言えない。「かなわない先輩でした」と彼らは言いますね。

——後輩をついてこさせるために自らが示されたのですか？

川原 そう、やってみせる。山本五十六も言っていたじゃないですか。「やってみせて、言って聞かせて、やらせてみて

……」と。

——当時の仲間とはその後も交流を続けられてきたのですか？

川原 OB会と称しての酒盛りをよくやっていました。外務省時代も、「川原が帰ってきた」といっては酒盛り。ロシナンテスの立ち上げも、飲み会で「おれ、外務省辞めてきた」というところから、「じゃあ、俺たちで何か始めよう」というスタートの場にもなった。「父さんはラグビー部の仲間に助けられている」と息子も言っています。

### 外務省の医務官をきつかけに海外医療活動に目覚める

——川原先生はどういうきっかけで外務省の医務官になられた

たま『外務省医務官募集』とい

うのが目に止まりました。アメリカへの留学の話もあったのだけれど、アフリカのほうが面白そうだと、本当に軽い気持ちでした。遊びに行くつもり、1年で帰るつもりが……。

——それが……。

川原 タンザニアに3年半、ロンドンに1年、それからスーダンに2年半。7年間、外務省の医務官を務めることになりました。

——外務省の職員として派遣されて行ったのですか？

川原 そうです。当時、同様の医務官は世界各地に80数名いました。大使館に赴任して外交官やその家族を診るというのが基

本的な仕事ですが、当該地に在任している日本人の診療を行うこともありまし

た。当然、その国、地域の医療事情やシステムなどについてわかかわることが多くなってきました。そこで、世界各地にいる医務官を組織立てて、互いの任地での医療のレベルアップを図るとともに、情報を共有、発信したりできたら面白いんじゃないかと思った。例えば、感染症情報などを現地の最新の情報をつかんで発信したりする。日本版のWHOみたいな活動ですね。

さらには現地で医療協力を行う。日本の外務省、医務官が医療協力を率先してで

## スーダンでやりたい医療活動をするためにも、外務省は辞めようかなと思った。

きるのではないかと。

そんなことを周囲に話していたら、賛同してくれる人もいたけれど、医務官の中には「川原、余計なことをするな」「それならお前、厚生労働省に入れ」という感じのほうが強かったですね。そんなこんなでスーダンに行って、アフリカでの医療状況を知るつれ、スーダンでやりたい医療活動をするためにも、外務省は辞めようかなと思ったわけですね。

——従来の医務官としての仕事だけでは駄目だと考えられ、それがロシナンテス設立に繋がったのですか？

——をご覧になられて、日本との違いを感じられたことはどんなところですか？

川原 日本の医療システムはやはり世界一だと思いましたね。国民皆保険で、それほどの負担がなく素晴らしい医療を受けられる。それは日本の医師、看護師、医療従事者の懸命な活動があるからこそと思っています。そこをもっと国民は認めてあげ

のですか？

川原 私は海外に1回も行ったことがありませんでした。大学を卒業してすぐ結婚したのですが、新婚旅行も長崎のハウステンボスに2泊3日で、2万9800円くらいで済ませました。九州から出られないですね。その後、外科の医局に入り、ますます海外などに行く暇などない。大学院のときにたま



スーダン首都ハルツーム [NGOロシナンテス、スタッフブログより転載]

現在でも自ら診療を行っている川原先生。〔(NGOロシナンテス、HPより転載、photograph by Junji Naito)〕

ないといけない。ただ、それがなかなか分かりにくく伝わりにくい。マスコミの責任もあるでしょう。いいものをいとなかなか言わないで、悪いところばかり探すような体質は変えないといけない。

——日本の地域医療についても、何か感じることはありますか？

川原 大学も変わってきたし、医局もだんだん崩れていつている。それがいいのかわいのかは分からない。それが原因でまた日本の地域医療も変化してきているのは事実でしょう。私の頭の中では、海外の医療、地

## 私の頭の中では、海外の医療、地域医療と、日本の地域医療とはリンクしている。

域医療と、日本の地域医療とはリンクしていて、現在の活動を通して日本の地域医療を何とかしたいとは思っています。例えば、私の出身地の北九州から国際協力、すなわち地方都市が国際協力する。今度、スーダンのドクターが北九州の病院に研修会で来るのも、その一環です。

——アフリカでの医療から日本の地域医療の問題が見えるということですか？

川原 医療だけではありません。農業をはじめ様々な産業だってそうです。人口の過疎や都市への集中、それがためにいろいろな問題

が起きているでしょう。日本の根本の再生に、「地方」というのはキーワードだと思います。地方の活性ですね。私は医療からスタートしているに過ぎないのです。

——日本の医療の将来も見据えながらも、スーダンで地域医療を行われようと思ったのはなぜですか？

川原 私は、選ぶ人生をしていない。アフガニスタン、エチオピア、ケニアなどと比べてスーダンを選んだわけではない。スーダンに行つて関係があったから、そこで支援をしようというのが私の生き方です。そして、支援において日本政府がやってきたこと、やらなかったこと、

やろうとしないことを批判はしない。でも、違ったやり方があるのではないかと考え、それをやろうとしたに過ぎません。

——まもなく、スーダンでは南部が独立しますが（インタビュア当時）、その影響についてはいかがですか？

川原 そう、2011年7月9日に南部が独立するのです。スー



スーダンと日本のドクターたちの交流の橋渡し役を担うことも。[NGO ロシナンテス、スタッフブログより転載]

ダンは石油を産出しますが、その8割以上が南部からなので、北部は石油収入がドーンとなくなる。だから、スーダンという国も変わっていかなければならない。そのためには、やはり人作りが基盤になると思う。すでに、大統領の肝煎りの学会も立ち上がって、産官学での取り組みが始まっている。私は、そこにも参加させてもらっています。

日の丸を背負ったつもりですが、これも日本に何かフィードバックがあればと思つてのことです。

——ところで、NPO法人名「ロシナンテス」の由来を教えてください。確か、「ロシナンテ」というのは、『ドン・キホーテ』の

主人公が乗る馬の名前ですね？

川原 私は革命家のチェ・ゲバラが好きなんです。ゲバラはアルゼンチンのドクターでしょう。それがグランマ号に乗って、全然関係ないキューバに行つて革命に参加する。数百人が何万人の兵士に向かっていくわけで、いったん負けるのだけれど、中には住民にかくまわれた者もいて、やがて勢力をどんどん増していって最後には勝つ、という奇跡みたいな革命を起こしてしまつた。その後、ゲバラは「もう一度、ロシナンテの背中にまたがりたい」という言葉を残して革命闘争のためにアフリカに渡つたわけ。その生き様がすごく好きで、「ロシナンテ」を複数形にした名前を付けたんです。

ゲバラみたいになりたいよなあ。

——もう、ほとんど達成していらつしやる気がします……。川原 いやいや、まだまだですよ（笑）。

### "One for all, all for one" その精神で突き進む

——ご自分を評して「あまり後先を考えずに突き進むタイプ」とのことですが、そのよい面はどんなところだと感じていらつしやいますか？

川原 計算高い人は年収や何かを計算して動くわけ。そんなことを考えていると、なかなか前に進まない。もっとおおらかになつて、「金は天下の回りもの」くらいに思つて、本当にやりた

いこと、やらなければならないことをやっていけばいいのではないかと。

——いろいろなお話を伺つてみて、川原先生は目の前の壁に一つひとつ全力で取り組んで、ブレイクスルーされてきたように感じられましたか？

川原 私にも師と仰ぐ人がおります。その方は去年、残念ながら若くして亡くなりました。その方に出会うまでは、本当にちゃらんぼらん男でしたよ。「医者になってボルシエを乗り回そうかな」と思っていたし（笑）。それが今、全然違うところで動いているからね。

——その方のお話を聞きして



ロシナンテスの成果はこの“笑顔”を見れば一目瞭然。[NGO ロシナンテス、HPより転載、  
photograph by Junji Naito]

川原尚行（かわはら・なおよき）

NPO 法人ロシナンテス理事長・医師。1965年生まれ、福岡県出身。1992年九州大学医学部を卒業。1998年九州大学大学院修了後、外務省入省。在タンザニア日本国大使館へ医務官（兼二等書記官）として赴任。その後、ロンドン大学で熱帯医学を研修。2002年、在スーダン日本国大使館に医務官（兼一等書記官）として赴任。2005年外務省を退職後、スーダンで医療活動を開始。2006年NPO 法人ロシナンテスを設立。

もよいでしょうか？

川原 カメラマンの方で、本当にものをよく見られる人だった。目を3つ持つっているんじゃないかという感じ。いろいろなものの見方や価値観があるというのを教えられたのも、その方からですね。私がスーダンに行ってから、「お前がやってるんじゃないんだよ。やらせてもらっている、くらいに思っておけ」と言ってもらいました。

——川原先生が大学院に進まれたのは、何か研究テーマをお持ちでのことでしたか？

川原 いや、先生に「お前、大学院へ行け」と言われて「はい」と答えた、それだけです。

大学院ではがんの血管新生を

研究していて、今やっていることは全然違うのだけれど、そこで学んだ考え方とか、もののとらえ方は、今の自分に非常に役立っていると思います。

——私たちは専門領域の中で視野が狭められがちなので、意識の変容が必要ですね。

川原 私は、節目節目の目標は置いてはいますが、それがゴールだとはまったく思っていない。ゴールはもっと遠いところにあって、常にゴールを目指しながら死んでいきたいと思っています。

——後進の育成については、どうお考えですか？

川原 今はまだ「ロシナンテス

ですね。ひとりみんなの為に、みんなはひとりの為になって、お互いにやっていきましょう。

——スーダンにラグビーを普及さ

せたいという思いはありますか？

川原 そうなんだよね。同志社大学で平尾誠二さん（同大卒、元ラグビー日本代表・日本代表監督）との対談を企画してくれ

「川原」という状態だから、組織改革をしないといけない。早く、私がいなくても組織として動けるように。私がいつまでも先頭に立っているのでは駄目でしょうね。息子も「国際協力の世界に進みたい」と言っているので、将来的に一緒に何かやれたらいいなと思います。

——夢は広がりますね。では、最後に再生医療の若手研究者に向けて、メッセージやリクエストをお願いします。

川原 やはり、自分にできることをしっかりとやっていく、それを積み重ねていってほしいです。再生医療という分野を一つのチームだと考えてはどうでしょう。「自分がやっているこ

とは小さなことだ」などと思わずに、自分にできることを一生懸命にやって、さらにほかの人たちとそれぞれがやっていることを尊重し合えば、素晴らしい成果が出てくるのではないかと思います。

——ラグビーにまつわる言葉で表現できますか？

川原 “one for all, all for one”



マンスーラ診療所での母親学級の様子。この日は日本大使が訪問していた。[NGO ロシナンテス、スタッフブログより転載]

たことがあって、そのとき平尾さんから「サッカーなんかせんで、ラグビーせよ」とラグビーボールをもらった。ラグビーもやりたいですね。サッカーはサッカーでいいけれど、「ラグビーは少年をいち早く大人の男にし、大人の男にいつまでも少年の心をもたらず」といわれるんですよ。

——川原先生が主人公のドラマが作れそうですね。

川原 いやいや、まだまだ頑張らないと物語にならない。私は、漫画みたいな人生になればいいかなと思っている。「続きが読みたいな」と思わせるような、ね。